

武德集覽

自慶長六年三月
至同九年十二月

二

和書門			
一五	一七	一六	一〇
七五	七五	六函	冊
號	號	架	架
類	類		

內閣文庫			
五〇	五七	五七	五
函	一	七五	冊
架	冊	號	類

內閣文庫	
番號	和 15775
冊數	10 (2)
函號	150 11

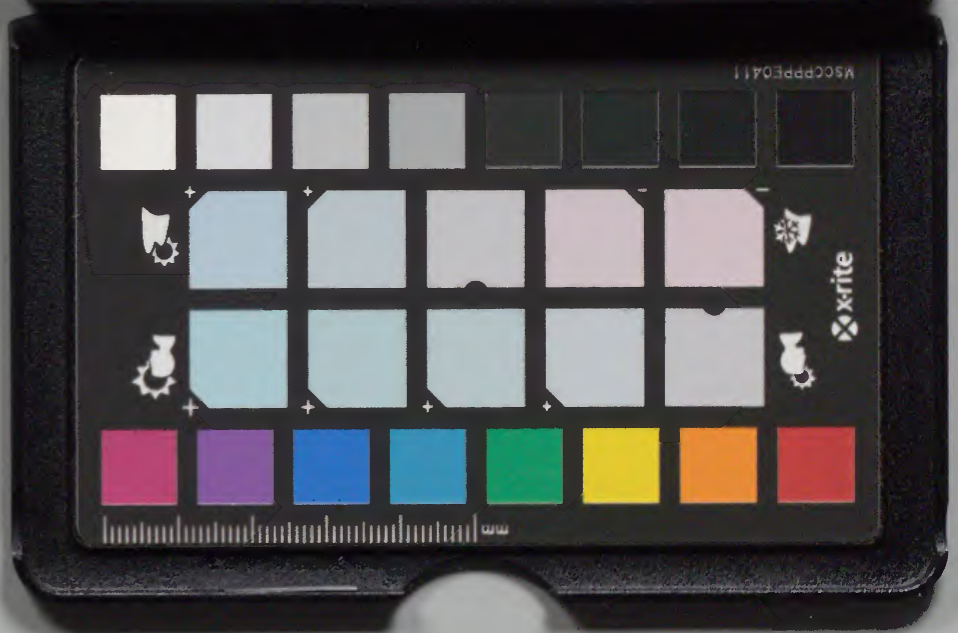


A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM Kodak



武德集覽卷之四



辛七

淺草文庫

御紀調所

東名目記云

大和君回冬云 御名例云 依之徳士

系記云云 ○創業記考云 ○武徳大成記 ○

海年集成云 神君回臘云 柳近西芳 依之徳士

系記云云 古徳云 大坂二凡云 中城云 渡所系記

小出相着新陽云 繫云 在大坂大石名云 中城云 登官云

十六日

大津若御石例出使然小依く列座以下太坂の城へ登り

新山と祝す 大津若御装束と志とられ等と交る

大津若御日記の創業は考夫の武徳大成記の海軍集成 大津若御鳥帽の由

出使然即ち中城へ登り秀形不備く然い威初と賀く

西城小坂 武徳大成記の海軍集成

十八日

大津若御池田三左衛門尉輝政と下り御茶入飛騨と和歌山

大津若御日記

松平和泉守家宗小止只那波と轉り濃尾若村の城

食邑二万石と賜り大津若御日記の武徳大成記に云はし御代家名瑞と和歌山と記す大津若御

目と云ふは

二月二日

右徳院殿池田輝政の宅小渡御あり是日

大津若御より福りの御茶入と以て茶会と催し衣冠と試

右徳院殿より御太刀白銀と輝政小賜り大津若御日記の海軍集成

六日

渡邊才兵衛と徳へ駿勇の功長きふ依り遠近権系

那江良坂田勲ら二子を加恩とらる内子よりくち

後同念二十人と拘へ命とらる 海軍集成

二月

定江州佐和山井侍去致 銀弓以素名本多中務 濃呂加納奥平忠作

濃呂大垣石川長門 矢呂昆崎本多量俊 卷呂吉良本多隆成

及吉田松平直重 遠呂濱松松平内膳 遠呂懸川松平徳政 遠州

横原実大出実か 駿呂田中酒井徳俊 駿呂府中内友三左 駿呂

興國寺天野三郎 駿呂二枝橋大久保信右 上総小多志本多あま

号城守御年徳 〇剣業記考子日

蘇也日記云此月 大相君領地之徳物之賜也

上野国箕輪の城十二と轉々々 江呂佐和山の城食邑

十八石井侍去初少捕虫政 〇武徳大成記日 〇徳編徳三万加られ十九石と

上総国大多志の城十万と轉々々 銀弓以素名の城食邑

十石石本多中務去捕虫勝 〇武徳大成記 〇剣業記考子 〇御年徳

忠勝の旧領大多志石本多内記忠致 〇武徳大成記 〇徳編徳三万加られ十九石と

成記 〇剣業記考子 〇御年徳 〇武徳大成記 〇徳編徳三万加られ十九石と

上呂高波の城二万石と轉々々 濃呂大垣の城食邑一万

石石川長門も康通 〇武徳大成記 〇剣業記考子 〇御年徳

上呂白井の城二万と轉々々 三呂島橋の城食邑八

万石本多量俊も康通 〇武徳大成記 〇剣業記考子 〇徳編徳三万加られ十九石と

武呂川城の城一万と轉々々 上呂麻橋の城食邑二万三

子石酒井内も康通 〇武徳大成記 〇徳編徳三万加られ十九石と

上呂布川石と轉々々 常呂去捕の城食邑二万六子

下佐國小島川石一万石と稱し之は深溝の城食邑一万石

松平又八市也利後日改○武徳大成化○萬孫傳

駿只奥國寺の城食邑一万石大野之市也市康京知

徳大成化○劍業紀考矣○永井考也記し之と記○萬孫傳是之と云ふ石

地と領と記○考元通繼

尾只小河の城食邑一万石水野之左衛門尉分長後内通

後後子○武徳大成化○萬孫傳中川作

肥前國加賜田石旧領合く十二万石寺法志摩也

唐高○武徳大成化

伴与國一万七石と稱し之は豊後國日田玖珠速見之郡

食邑一万七石石東島石島康京○武徳大成化○萬孫傳久多傳在也

江呂小於く加賜二万石旧領合く七万石永井右之也

在勝○武徳大成化

上佐國勝浦於く加賜二万石旧領合く二万石植村也依也

泰也賜し○武徳大成化石と記○萬孫傳石と記○以上并は茶飯

松平内膳公家廣遠江國濱松乃城と稱し萬孫傳○劍業

記考矣○永井考也

本下右衛門守延後下領加くられ之石加し之豊後

國連足那と稱し日出の城と稱し萬孫傳

相見小田多と大久保也稱し石島乃城と稱し考元通繼

武島川城と稱し駿只國中城系地一万石田井傳後也石利賜

○武徳大成記月一と云ふ云

台徳云乃所坊男長凡若所便生母云ハ所基不後并
飯前乃長政女也或曰実ハ所妻服 誰氏の女乎と傳す 編年集成

二月十九日

丹羽勘次氏次卒於十二歳 苗孫傳○編年集成

廿二日

松平兵十郎忠清享年二十而歿之 卒是ハ二本の
松平藏人信孝の孫九郎右衛門 主カリ子也忠清ハ父
主カリ以來傳々ト大当政ト勤仕也 編年集成

廿二日

自大坂移于伏見城 即奉傳○創業紀考矣○武徳大成記月日
之記ハ○永井忠之九○八朔北ノ○西系忠之八日○編年集成

大坂の城御留多拵ト云野ニ布云信村康宗ト西の

丸小孩ト云 即奉傳ニ宅惣信村村康宗ト云 武徳大成記
代々ト云此康宗國東ト云

廿四日

秀忠自大坂移于伏見 即奉傳○創業紀考矣○武徳大成記
月ト云云○永井忠之九○安之通傳○編年集成

廿七日

豊后秀村代様大御言 之様中 即奉傳○武徳大成記○安之
通傳○編年集成○八朔北ノ

右徳院殿所入洛 武徳大成記○創業紀考矣廿八日○編年集成○八朔
北ノ

廿八日

秀忠代様大御言 即奉傳○武徳大成記○創業紀考矣廿八日○武徳大成記月ト云云秀
忠代様大御言被任給ハ廿八日也○武徳大成記月ト云云○永井

交長比○交之通監○八朔記多○所系果

廿九日

秀忠未内

御奉傍○創業紀考去○嘉右日記○永井考去記○交之通監○海軍

廿日古右記付後

御奉傍○嘉右日記廿八日下野考去古右記付後山代位付位下

八日○武佐大成記月とるさ

二月

戸田古佐考去次累代の不領田系の城と給ふ二万石

嘉右日記月とるさ此○武佐大成記月とるさ

四月十日

右佐院及伏見と給はく東國へ赴き給ふ嘉右日記○

創業紀考去云秀忠云関東へ山下向内へ合付立

乃有陣判意

十六日

當依竹又義主上洛依申く嘉

創業紀考去○嘉右日記義主依申ふ

藩編後云六年の春のころ大納言左衛門入道

給ふ事とある方の内知り給は進討のたえと云々

ハハ義主依竹義主ふ相それ給く國と立く

大所不心事とく武蔵の神奈川の宿あり

大納言及り一乗ありあひあむらびごし松とよ

し給ふ事とある依申ふむらひと云々

大忠あり

附寺領之印於高野山且定宗門之法式在圖條所奉信○海○書

森心日記云高野の寺と高野山に附し且宗門の法式を奉
と定む

高野山寺領身附狀

一七の百石但此は任然 高野山 高野山

一二の百石但此は任然 高野山 高野山

六百石

右領知事代令高野山附就配當し通令して高野山に
抽去長地入仰承高野山一夫奉承四海靜穩精神之是

高野山寺 森心

全別筆高野山中

高野山法度條

一 高野山法度條

一 高野山法度條

一 高野山法度條

一 高野山法度條

一 高野山法度條

一 高野山法度條

一 高野山法度條

一 高野山法度條

一 斎戒三つあり月子不恒と授戒後種科ありと
在院中碩学八人下有配分右八人月關如く
内之学侶中定量之学不恒福次彼院之学并進
附之量光院加増之為高位一代也

一 徳伽藍破壊之時は後院院人等中造之令
造之於入之善助之為在院一造之徳伽藍正
管別心之入之所理先之波津言り
右条之賢之付方延隆佛法永代不忘定可抽下
泰平之懇祈也

号之七年中一書之泰康

全別筆之在院中

廿日

西郷孫九郎忠貞率々威制子打々々依々約命と

奉々々分若校々正負孫九郎之勢勢之續
泰平之紀○編年
集成○萬福集

五月

秀康公去年越前國と為々廿月福后の城之移り

二十七日在秀康公之居之於去々々以之入り之給ひ之入り伏
御之入り之給ひ之御前之依之入り之御前之入之給ひ之なり
此之改之御前之是萬福集○編年集成

六月十日

松平因指心泰康此勅命と家々々忽自害之て死を

廿六日

年廿六歳よりつらなりと云地梅井の所 葛藤信○葛藤日記内記
○海○集藤家廣政の遺り〜長江船物主と云云と記す
由懐あり故密に自殺し病死の火被流と記
今川保与と氏詮院享年六十六歳〜卒 海○集藤

彦坂小刑於河勘事と云る葛藤日記○海○集藤○創業記考
是云彦坂小刑於河勘則河門也此

知り方三自代の二也日と記す

廿八日

松平茂おと利光申納言利長う葛藤と云利光字長ハ利長
ハ男利長うカ

葛藤日記

六月

築城於厩不傍今戸田一西左門 居る
○海○集藤○創業記考
○葛藤信二月と云○海○集藤

創業記考云云曰是左はと勢多福戸田左門と云
被置也 二月と云

曰書云六月厩不傍勢多左はの處○是石共被移
被地

葛藤日記云云月 大津若徳國の事 命て厩不

傍に城と築の是事なり八人をして監す是下と云くは是
事の後城と築

始也 不日し城成る戸田左門一西 左命と云く大は

の城より厩不の城に移す○武治大成元

友實と云虎子 命は是厩不の城縄張石垣築記

松平氏より久松城遂に長濱松の城と為す
内膳正家度之記
武徳元年三月に記候也○備子集或家度未子なく方左久
右於下濱松本方ありと記候也

世上一統丁浪巻と為す
作付幻通用と浪位被

定
浪巻年表由記書○令左由記書小ハ文禄元年より令左より
定の中あり候

此は今付迄為系勝備計し付く有寛宥と令上

洛
内府云 丁有出仕の由也
創業記考其○海年集成景
勝の眾と有り、一、九、十二日

七月十日十日

内府云瘧病
創業記考其○備子集成

廿七日

上杉景勝未子洛
御年信○創業記考其○海○集或○交之通隘下小
其○八朔候也

其由日記云景勝洛より去年より三河も秀康又

因之教先と傳ふ是も依く
大社若之眾と有り

と入洛申す也
○武徳大成記○改日記○考

廿七日

内府云瘧病所不復し又又甚病疝
創業記考其○海
年集成

八月十日

内府云病癒不復
創業記考其○海○集或

廿七日

上杉景勝檢中減令付之地百万賜弟氏之地
二十
万石○武徳大

最上出羽も義光の命〜景勝の領内酒田の城
と請取らるし中城の宗勝の長河村を義志田修理亮
お植籠の城と改めたるを不依におねるる二男志水
大藤左捕及し植籠甲斐とと都おと〜中城
豊前も魁延越ふる志村伊豆と野辺は内中捕
白石佐前も里見越後も加茂源左衛門尉赤一百五子
余騎山形と奈〜月山の嶽と越へ酒田の城と向
ふ城志田川村廿廿と開く酒田の城と〜志田
最上川と前も高〜海と清水の軍勢川岸
隔く信率川と海らんとお進と〜お長川水

城〜海と夏とゆき移る如し十余所川下より櫓船
十匹又艘小取寄り去来義光の味方の属する下次
右馬の府川と海〜向の岸小上の志田河村信率と
指揮〜〜大砲と取〜夥布をを推く下次右馬の尉
之隊の去銃砲小中〜死傷の甚多〜是不依〜
下々軍士不備餘〜進む夏とゆき下り親族産丹
半右衛門尉之隊の進み夏と夏と士卒の機と勵を于
時清水大藤左捕川と海〜下次右馬の尉と接志田河
村款の大藤川と海〜鼓ひあると〜信と乱〜
攻走を下次右馬の尉利小寄〜酒田の城と〜是と

追討首級百金と得たり部を大花土捕り小徳く
酒田の城小奪く城と圍く奮討戸は九節五節政盛
後右弟亮の長元はお獲り城下の民を小放火して清水
と同城と圍く是を及び城を志田河村力とありて
拒り我に怒りぬる寄手の隊長加友源左衛門尉吉平
中々死に置し越後守先登小進み大寺の橋と
後々城りし攻入志田河村是と非とくも寄手
の猛勢鼓ひぬるの勇防く更とありて遂に和信
大花土捕り酒田の城と請取志田河村り
一命とゆも酒田の城と請取志田河村り

是とありし大花土捕り山形小海
後右弟亮の長元はお獲り城下の民を小放火して清水
と同城と圍く是を及び城を志田河村力とありて
拒り我に怒りぬる寄手の隊長加友源左衛門尉吉平
中々死に置し越後守先登小進み大寺の橋と
後々城りし攻入志田河村是と非とくも寄手
の猛勢鼓ひぬるの勇防く更とありて遂に和信
大花土捕り酒田の城と請取志田河村り
一命とゆも酒田の城と請取志田河村り

廿六日

賜分付於蒲生秀行 忠三年後 所年傳 ○永井長元 ○孝元通隆 ○創書記

後右弟亮の長元はお獲り城下の民を小放火して清水
と同城と圍く是を及び城を志田河村力とありて
拒り我に怒りぬる寄手の隊長加友源左衛門尉吉平
中々死に置し越後守先登小進み大寺の橋と
後々城りし攻入志田河村是と非とくも寄手
の猛勢鼓ひぬるの勇防く更とありて遂に和信
大花土捕り酒田の城と請取志田河村り
一命とゆも酒田の城と請取志田河村り

編年集成云蒲生友三郎秀行、奥兵の内糸勝没収
の地六十町石並に江見日野の旧領二町石と給

八月下旬

奥兵和賀一揆の棟梁和賀守とる大親伴達政宗

の郡代と兼職し或は奉ると動かし松平氏防備を
長谷尾田行右衛門之次郎より二万石賜り伏見城備
命をり。更旧之と棄てて由緒をり。更と保り固
す。之を元次後より古和と改換拜の銃士なり。

十二日

至佐和山

御年譜○創業紀考矣○表右見

十日

至于大垣

御年譜○創業紀考矣○表右見

十六日

至于波阜

御年譜○創業紀考矣○表右見

十六日

至于加納而見城地

御年譜○創業紀考矣○表右見○此并至七九○考
之通鑑○御年集改

十八日

台徳院殿山田十左衛門利と古く為事を見たりと

天正九年一主利威遠近浪松の城中小松坂作

主徳正と口偏及い聖教と白の門外より遊り

主徳正と殺し浪松とお奔り井伊直政より往り

誓岳此同十八年小田原合戦の時直政小属り相

見小赴り小田原の城徳曲福夜軍の時戦功有

疵と表りて後不直政の表と云く蒲生野原と云

口上属一勇兵九千、近礼の時軍功有、徳祿と被
度々の戦功、右様小達、よく再び御事入り
属する者也、あちり記

六月六日

入江戸 御事簿○剣書記考矣○武佐大成記○永井玄忠記○交え通鑑○
あちり記○編年集成

富山義真 後ちり記 作 大補君小湯記 あちり記○
編年集成

編年集成、云江越越後上條の巻之きり、富山山城
義春入江入菴、婦子上秋、源氏帝義真々々。

神君、編年集成 あちり記

九日

持于忍河越亦交 御事簿○剣書記考矣○武佐大成記月と記す、あちり記○あちり
記○編年集成

廿八日

還入江戸 御事簿○剣書記考矣○あちり記

閏十一月二日

江都市中、大半回祿也 編年集成

十二月

岩付、近所、又御事野 剣書記考矣○編年集成

廿八日

賜字都宮 拾万 奥平家昌 大膳 御事簿○剣書記考矣○武佐大成記
月りと記す、あちり記○あちり記○永井玄忠記

○交え通鑑表目とあちり記○あちり記○あちり記

世年

稲垣長茂上野國伊勢橋の地と賜二百苗額

飯初小太郎於水本領飯初乃郡と給二百又之と給又吉田

也叙爵因幡守小仁之苗額

相馬孫心止苗額大市守小仁之廿年叙爵

伊豆守小仁之苗額伊豆守小仁之苗額伊豆守小仁之苗額

友作苗額友作苗額友作苗額友作苗額友作苗額

日根野苗額日根野苗額日根野苗額日根野苗額日根野苗額

壬生の苗額壬生の苗額壬生の苗額壬生の苗額壬生の苗額

法奉苗額法奉苗額法奉苗額法奉苗額法奉苗額

正威苗額正威苗額正威苗額正威苗額正威苗額

内友苗額内友苗額内友苗額内友苗額内友苗額

相馬苗額相馬苗額相馬苗額相馬苗額相馬苗額

大久保苗額大久保苗額大久保苗額大久保苗額大久保苗額

南苗額南苗額南苗額南苗額南苗額

桃生 牡丹 登来 盤井 本吉 氣仙

膽沃 斐史 玉造 栗系 志太 遠田

荊田 策田 直理 高城 志川 江利

伊具 若取

右ノ外字多部ノ内九ヶ村共ノ惣石六百石トシ海子集成

祐若妙壽院竹窟ト伏見ノ城ノ後トシテ石多由漢書友

東萊ノ十七史ト徳ト積海子集成

祐室町為軍家ノ功長一也武勳少捕及長ノ婦子

左ノ馬籠勝蒲生家ノ旧長約本根右を利政且隣ト

伯耆ノ与夫勝ノ次男孫左衛門若勝亦山家ノ人小列ノ合是

と給 海子集成。

去年関ヶ原ノ於忠死トシ友黨ヲ有之ヲ治ル子ヲ監

高久 祐若ノ有獨也其也ハ繁邦年 海子集成

中將与夫而室好ニ及大將ノ船手トシテ被地トシ

二百石ト給 海子集成

本村原ト帝之正ト 台徳トシテ附屬トシテ是ト

三右衛門吉清ノ二男トシテ年々 祐若トシテ海子集成

祐木トシテ備前次冬ノ及繁邦是介ノ本領六百石

ト賜リテ領知小富若トシテ御出陣ノ期ト及馳参ト

右ト勵スルニ与 命ト美ル 海子集成

常川山城も慶應侯に任下し叙す 編年集

武田家の旧臣甲陽巨磨郡武河の士十人へ
天正十八庚寅年以來武田男衾郡神形と堪忍分と
賜りり申りりて又再回國甲斐小於右の采也と云り
年若く計取叙者部下に属す

二百石 折井多丸 柳江去於信俊

百八十石 折井信俊 八十石 曲園信俊

六十石 折井長次郎 八十石 折井氏部

九十石 折井長次郎 六十石 折入九郎三郎

百十石 折井新助 六十石 有泉三郎

七十石 山内 百石 馬場右馬

八十石 吉本去馬信俊 二十石 吉本去馬

右取合二百六十一石 榎川小久 大久保十右衛門長安

成瀬山若正成相海國村 自余地百六石七斗八升

折井右馬の領地より祖税と叙す 七十石の

筆者無役の領地より富岳の軍役と叙す 編年集

今年より休渡國 東康公御領と威御事人

二人とを河村とを主命政事と撰り後世に

といふは是也河村去馬の是ハ右岡の時より互に國中

清玄合に叙す 右岡依在年 是より人ハ今も互に御事

佐渡年代記

今年より大判小判一序列 年表

今年より佐渡山田銀取出の事 年表

今年 秀忠の姫君江府より所誕生 年表

宗對の事より日本朝鮮和議の事 年表

海外教道國入貢 年表

今年より寛永十一年迄御朱印船の事 年表

の先祖より安ん商人共博多外國の事 年表

武徳集覽卷之五

安永七年 壬寅

正月一日

秀忠の御公

御朱印の御業に考ふ○永平寺の御公考ふ通監○海子集

秀忠日記 江戶城に於て 在徳院殿

大神祭の御事 御公の新春の御事 御公の群長若正旦乃

賀儀の御事 ○武徳集

二日

出陣初 海子集

上方初之御雄人候下河原の御事 海子集

六日

叙後一位 御年傳 ○創業紀考矣 ○武徳大成記 ○編子集成 ○御年傳 ○八胡從安 ○交元通暹

孝若日記云 右侍若長一位小叙 正二位

右徳久正二位小叙とら。 編子集成

十六日

小野源右衛門 子盛始く 孫福中 是ハ江戸豊後と云

絶り孫左と云る政り也 御年傳の地名(江戸) 編子集成

十九日

公出江戸赴洛 御年傳 ○創業紀考矣 ○永井若長紀 ○交元通暹 ○海年

武徳大成記云 右若長府と云 伊勢路と云

洛入りんと云 武徳大成記 ○孝若日記

廿六日

安友与十弟 正次使節と云 越前と云 編子集成

正月

并侍云初か捕虫政提比位し小叙云 御年傳 ○後考系 古六年正月作

菅利長園楽し 板子大納言云 右徳院及系られ の御事

於るしと多事れハ端ひ〜物又す〜な〜〜次 利長 此時
其令百枚白銀子板時腹百領と云大納言云より上 御年傳 ○武徳 御友也 御年傳 ○其令百枚と云考す〜〜終〜〜大成記利長初 正宗の御年あり ○創業紀考矣 初大成記同

編年集成云 某と云 徳彦等江戸 某系府の事

神君固禱くむるありしに加賀利長苗廿二日此
老角系名の子ありしを以て前代と云ふなり
之由記之利長也 古徳公一得と執る
秀也公一於関東申共万石被渡但此月二三百石不
足し也 秀也公一別小姓并小馬也以下不殘配
苗也 劍業記考矣○編年集成正月より

二月朔。

丹浮重政 去秋卒

歳上 卯年傳○劍業記考矣○武徳大成記○武徳中
十二日記○編年傳○後考系系○考え通鑑○永井

長長凡○編年集成○八朝記○年表

九日

東奥の侍連政宗頼所く 築市の船井那仙古城
造畢く移徙す 神君く 芳金子也 古徳公
より 鷹の捉まの乃酒井八乞指と以野く
武之政宗ハ 弘永和泉 主候云々と以上使と答也
編年集成

十日

入伏見城 卯年傳○劍業記考矣○武徳大成記○考え日記○編年集成○

十八日

有之醫者久志在左京亮と栢間の御子指遣りしに療
養之加るといふも是病きく依り廿月十二日遂に
卒し 七十 六歳 海峯集成

十一日

賜薩摩大隅安堵之平於河津龍伯 河津左史 ○所奉傳○家
○萬孫傳○永井左長紀○安元通監○海峯集成 日記○創業紀考矣

廿八日

堤伏見入洛 御奉傳○家名日記○創業紀考矣○八朔紀
編年集成云伏見より洛陽二條の亭より渡河

五月朔

乙未同 御奉傳○創業紀考矣○家名日記○海峯集成○八朔紀

大伏見堤兼云初と捕基宿後比位下り又叙侍後之の
海峯集成

二日

院系 女院 時有猿 天皇 院 御奉傳○家名日記○創業紀考矣○海峯集

二日

詣于相國寺 御奉傳○創業紀考矣○家名日記○海峯集成

二日

遂伏見城 御奉傳○家名日記○海峯集成

創業紀考矣云又今春能有之能未終 内府云

伏見之遷御

八日

佐竹義宣

右系

城常良之地

八十石

賜社田砥浜之地

二十万石

信○藤原日記云初社田五万石と賜け有く後仙州十五万石と加賜す○武佐石成
元同上曰と云す次○藤原信○永井等七紀○交え通鑑

剣業元考矣云常陸佐竹國勢之儀と作出於其在伏

見右と云分以便宜の事免角之意極之賢是次方

く此返天是則十二日常陸在國之文我意善事申す

此使有く秋田砥浜迄二十万石佐竹より下りて年

海軍集成云義宣と伏見より旧領常陸又十二万

石と轉り羽衣社田戸は地二十万石余の倉邑と稱

命と云り

此日常陸乃國よ此使と云これ又義宣と始く宗徒

乃事人ありしは此と云作りし

藤原信○海軍集成の劍業
記考よりハナラの事云

松平因防も康を松平太左衛門尉一生由良信忠も

康は其命友因徳也と小命して常良水戸の城と

ちりしは藤原日記○藤原信康を一生三人と記○武佐石成記

藤原信云松平因防も康を水戸の城と信取し

軍云と云く此と云りてと云男ハ其君と云

本多信俊も正信太左衛門右衛門命と云りて

常良と云板子國中の割法と定て事平後正信

おしほ 江戸より 幕名日記の武徳大成記見たり云の苗額

佐竹の押とくく松平信直の信一 命と云く常力次

江戸坊城友と勤しと子信右 後ある 因國府中の城

と云 幕名日記の武徳大成記見たり云の苗額

秋田回至小野と遠くは藤とら小野より本領二十

七万余石也被幕長戸伏中慶に於係六郷亦並系と云

是君臣の義と絶くく公儀とら有り故也 幕名通鑑

岩城忠次所より陸奥領の地収公と云り 岩城の郡 出羽

の國龜田の地 二万石 苗額 〇海〇集威

変え通鑑云佐竹金房岩城但るも平宣陸も義宣同

意きりると以陸奥十二万石と減し由利二万石と云

岩城城との駒本根右と利政無し那懐元お是と文取

ちの 海〇集威

秋田安東太師の末季平陸奥の郡と云く宗戸

乃城 〇五苗額

六月部

経始伏見城 伊年傳〇幕名日記〇劍峯紀考云〇永井孝之記〇幕名通鑑

編年集威云伏見城又と云く経始す二條の

所館とも城郭の管構あり 〇八朝記の二条城と幕名日記と云り

十一日

遣本多正純南都乐入る官位勅使勅修右大辨光
豊原橋右中弁徳光柳系右少弁兼光水勅封宝威清平信
孝長記○豊之通暹○所喜男○海子集或○年表勅使一君柳系右少弁と云
○永井

剣業記考矣云十日以南都南都南都南都
とい被るん因 勅使彼を世以蘭奢得と下被截し
内春ありとくとも不恰を申のうふく被止し一信
存ら日終云本多上野介正純入る係石見守
命して勅修右中弁徳光豊原橋右中弁徳光 勅と
勅使勅修右中弁徳光豊原橋右中弁徳光 勅と
子く宝威と封也○武徳大成記曰

亭

依行の城と徳取 剣業記考矣
依行右系兼我宣之替りりり七十余騎累代の地
と云りく秋田の城入高橋信○海子集或

廿八日

肥前國より飛脚に戸小判並に金銀船を岸すのり
と往進を船中よありまの志凡二ふ二百余人高橋信
剣業記考矣云廿六月志船名船人子二百人あり
交証より 内春ありとくとも不恰ありの生虎一巻一
孔雀二但虎ハ不系也○海子集或

夏

戸次政盛常陸國那珂郡とありつる石戸石戸藩箱巻
日記常島多賀郡石戸と記月日とあるは○武佐大威日記上

七月朔

為濃加納重信始家 創業紀考其○藩子集成

十日

佐竹義宣の家人 和蘭の商とてやうつたるもの未
謀及と企く松平お左衛門の一生の考する水戸の城
と誓ひしとて一生涯の志ありしと云ふ
一人と擲りつゝ折回小及ふ彼傳友のとも悉く

あつたる世相美の時代一凶徒たりしより後
其一生と神とて城とある一人とて之と事とを防戦
す凶徒なりしよりなりしなりしとて退く群馬丹波
馬場和泉おの張平人なりしなりしとて之と事とを防戦
りし 藩箱巻の常島日記日と記され○武佐大威日記と記され

一橋の張平人お悉く是とて捕松平丹波とて田
の城に於くる場和泉とて生捕く水戸の城に
をを別世とて江戸の海邊を横使しとて安友
お左衛門の村お左衛門石戸の村水戸小島とて之と事と

法下て後女使一橋の張本人か人と携へて江戸の海
凶徒の残黨小示こ人々為よ又水戸小ひき海して
彼地不致く遠く斬罪せらるる ○武徳大成記

十六日

井伊右とと更直勝し 右徳久御月書と云

去程心愛信く儀抵子と他あくる日中江は御
を去る時分若方と云ふ海一の入程行要也

七月十日 秀也

井伊右とと更直 海軍集

十七日

有馬法平卒 八十金蓮高橋藩 ○海軍集咸廿八日と記 ○八朔記又廿八日

森忠日記云有馬法平 俗名中務 卒云を嫡子と云有馬氏

丹波國福智心の城と居く別と米地六万石と領を父の

法平の遺跡折尾有馬の二田の城合是二万石と豊氏に加賜

是も依旧領合く八万石と領 日と云ふ云々 ○武徳大成記月と云ふ云

十九日

大所不御養女と云く有馬と云有馬氏と云

らり 大所不御養女長は松平源七郎麻太郎の娘と養女と云ひ也
○養女入りの卒と云ふと遠くはくくりぬと云ふは
も也 高橋藩 ○森忠日記と云ふ云々

不才の中務と捕忠勝及一位の局とお副りれ婚礼の

後式と伺くし之を於時御腰柄御服柄と豊氏に賜ふ豊氏
うお右右吉田折取介御前より下く御腰柄と賜ふ
大威元月と云ふは○海子集威
日と云ふは
右月記○武佐

七月

松平伊豆守信一水戸城と云廿月日旬より藩御傍

武佐大威元云 神若松平伊豆守信一と云く水戸

城と云くおりし是を子安房守信吉と云く信一伊

豆平信一の城と云りし是を六々云信政と云く常呂守

申城と云りしは 月と云ふは○海子集威と云りし

信一の土佐田に御腰柄の御腰柄と云く信一伊豆守

と云りし輕率父の如支配し本多正行の隊小属を
河右長つと海子集威
附属と云り

八月二十九日

母公逝 御傳通院 御年譜○海子集威○武佐大威元○劍書に考文○海子集
威七十五 威○八期に於○西法号記

御年譜云時御年七十六歳傳通院御建立御遺命

しして御法律と号号小唱一説小初葬事帝和恩院号

徳泰院改元和三年丁巳葬傳通院改法号

以費小傳云大方殿おと六月都小初初り初

お初ハ石不古跡なしと法廷所ハ海子集威と

云くしと云ふは信一の城と云くしと云く西年

七十あると云ふこの御よりひきかへ 東照公の御事
たぬひのた文の十二年ハ大官殿より川に下り
由きや 傳通院殿と云ふは流石なるかゝる川
乃に量心寺にありし相子ゆきまのりし今の傳通院
あれなりし所傳供の神二百名の地と云ふをり。

海。

内及右系道正成依思城の定と命とらるる二子
石坊封あり給とて七石と領とそはに命とらるる正成
父子とて父子とて傳と因と 海の集

九月

賜参良作子於松平忠明忠明御事信の創業記考其の海船傳月。

忠明日記に松平忠明と云ふは忠明の御事信の創業記考其の海船傳月。
あるの内より於此地と賜りし二石作子と云ふは
九月と云ふは

編年集成に海外探真平法匡と云ふは忠明の忠と稱して
父祖の旧領に及後忠明作子並に江右の内又力と
と云ふは忠明平忠明と信昌と二男也 土月廿二のりし也

世秋

古伝國に唐船寄来りしは往進也 忠明日記の八朝記
創業記考其の古伝國に唐船寄來りしは往進也
日本船より取巻く事と云ふは唐人も封する事なり

卷物山下以使有音信依人へも意及下遂礼と也
のき事ふ乃條對るも使彼船へ宗福さして伏見へ
下河換使に令言とる使と被お下然も風能折と
て帆柱引と事流炮のともなる相二つ放し鐘鼓打
なりし与り付する小船共宗福へ走りあり對るも
使も同在彼船へ引連り衆人へ二三人残り宿る
是ハ對馬より吉原の使也松別如妙船と相する時
ハ帆柱と取おたりありと使のりさく取さるる夏も是
也とらら

右徳公の臣え甲陽元刀の士高尾忠左衛門文四郎

氣と義の 海軍集載

多賀谷徳政を主経度子七月隠謀の企ありと
そ子たを三絶 初傳 末傳 新君へ祈するも此頃主経
の死と宿願常良河内郡下妻富田大方六万石
の領知とぬきりそ子たをハ猶結城少将秀康が長
よ長長とくく二万石の地と安堵を 海軍集載
柳原康政が野江中津新保宗徳義が政下妻よと
て松島の城郭と文取に万石の地と戸伏九郎政盛
よ對を府中一万石と六口去康政が宗への授新治
那内常ハあると在嘗侍候りる茂親よとふ此輩ハ

羽呂社田小野と瑞隆の附庸をりし瑞隆の宗廟
よ属をとりしとて戸沃六々本堂に祭係打越希尾
はふ皆最上と侍り 神考の志と励依しと友秋
田の急ハ佐行の如くは若干の加恩しと常陸
の地よ福さる 海軍集成

十月二日

出伏見赴江戸 御年簿○お名日記○武徳大成日記とあるは○水舟考考也○考元通鑑○海軍集成○八洲紀事○御年簿日記とある
創業記考矣云 内府公園東御下は日市場より
船一々熱田高小より繪上

十八日

金吾中納言秀秋卒 二十一年御年簿○お名日記○創業記考矣○水舟考二威長記○考元通鑑○海軍集成○海軍集成○海軍集成

七月十八日と記

十月八日

松平三郎也前 于時十一歳後よ遠良を川より江戸小舟を
本多佐治後と正にといく 上関の達を石く西の丸小
登く 大祓看の湯をき天の赤府御感の 作と
蘇る本城より来る若狭のあゝの北御尋のまふ
青山七右衛門尉候を即青山と石く 均命小曰隠傳
定勝の二男遠良より来る 右徳院殿小仕人と
歿是即我の寄子なるの也と 命有く同朋管阿

洋とお副ら丸青山七石足(村と共)中城(登)人
久保お模(る)中(隣)と奏者(と)二(市)江(所)始(く)
古徳院殿小徳(と) 武徳大成記○編子集成○古徳院
日と云云云

廿一日

内友(た)る(今)改(長)兼(地)一(万)石(と)加(ら)る(古)徳(院)傳
編子集成(と)女(子)内(友)た(る)今(改)長(小)一(万)石(加)恩(あり)
總(く)二(万)石(と)領(と)又(江)次(右)馬(兼)長(伏)見(小)志(死)を(る)
ゆ(り)り

廿二日
廿三日
廿四日
廿五日
廿六日
廿七日
廿八日
廿九日
三十日
廿一日
廿二日
廿三日
廿四日
廿五日
廿六日
廿七日
廿八日
廿九日
三十日

廿一日

出江戸赴洛 御年譜○武徳大成記○創業紀考(夫)○永井(考)七(記)
○考(元)通(鑑)○所(系)異(日)と(云)云(り)

廿月

武田信右 名(可)子(代)依(母)氏(号)武(田) 賜(常)員(水)戸 元(祐)下(經)御(年)譜(○)武(徳)大(成)記(○)創(業)紀(考)夫(○)永(井)考(七)記(○)

武徳大成記(廿)月(八)日(記)○考(元)通(鑑)三(下)考(元)記(○)舊(編)傳(○)海(年)集(成)水(戸)二(十)考(元)石(路)考(元)廿(月)三(考)の(云)云(り)

十二月

洛陽(大)佛(殿)焼(失) 御(年)譜(○)創(業)紀(考)夫(○)武(徳)大(成)記(○)永(井)考(七)記(○)考(元)通(鑑)○海(子)集(成)○八(朔)記(云)

廿下

至熱田(村)于(塗) 御(年)譜

創業(紀)考(夫)云 内(府)公(熱)田(小)志(所)路(次)中(意)野

故(上)志(意)少(一)所(不)例(也)

廿四

入伏見

御年傳○創業紀考長○おわりの記○永井志世記○おん通暹○海の集威○八相記

廿八日

鴨津右恒

後改名
康久

来伏見而見于公

御年傳○おわりの記○創業紀考長○海防集威○永井志世記○

海の集威

武徳大成に云ふは鴨津伯の使に鴨津右書右長依んり

事ノ罪と謝しく曰我公逆黨ノ与すししく共然し

張を人小あはれ新伯幸しく智と教りしり時義弘

九りの死罪と保と赦しれんすと請ふ 祢若洋表し

忠長と云く曰新伯累世領する所の薩戸大隅乃

西へ及日向乃徳縣郡故のましく領をて 攝津右

恒を嗣と成く康徳と傳へて 義弘逆黨小すし

ししと陳謝すの不謂はれ小あはれ請ふと

外より我言傳なり新伯子く請ふと入るし

右長使と地くそと告新伯治り入 祢若の得

多んと此時し保集院久也博起國中郡加はる

是も依く康長と義弘とてははるしと云ふ

と後義弘曰我 祢若の對し一旦敢てなり時ハ

為得すしと傳りありし恒とてははるしと云ふ

しし恒の曰きしし父の累と以我身と害と

し

悔なり方汝入るの如く決て既にして浮集院
の堂意く平た恒即日奉送汝に向ふ時福考正
別時賜く國よめり去座の船中よりち恒
多し正則昂船と及しち恒と去しち故
より使と馳く本多上野今正徳く憑く事と
神考し告め替くち恒く爲席く
神考乃伏
了りしり及く之容と成くち恒と推しち登城
家臣あはち長保替り兵呂お後 神考對面恩
遇甚厚し褒めると賜ひ汝は家意く女信と恒
と恒く憑く請く曰字正因秀家薩長く流せ給

頼ハ死罪一等と減せん 神考是くと評す

廿月

松平親は信吉 信吉子信 初く水戸城友と 九月
父と交替し水戸城とちりとい別く三子石と給海の集

廿年

上井三帝利賜下総國水戸川の地と給す 一万石
日記○武佐左成記○海の集

青山石菰か備幸成下総國阿波の地と給す 八万石
衆古日記又百石と記○武佐左成記と賜と記数より○海の集成百
石と給す

松平 六田 唐長下総國古河の城と給す 二万石

高木主水正次下総國一ノ市領加り。二子ノ市領加り。
二子ノ市領加り。今ノ七子ノ市領加り。

武徳右威元公今奉奥平兵衛守信昌率々

掛牌守と号し此〇梅考系も同上

武徳右威元公今奉奥平兵衛守信昌率々

邦君加納城と信昌ノ二男也政小賜と政初也

小養子也廿心と信昌ノ封と継子松平梅守と

其

編年集成云及保小太照定利養子也七市也政實

父奥平兵衛守信昌政はとつて故主知奥徳右威

元方石並因不新田二万石養父の侍以上野吉井二万石

て十方石と給り外孫守も故松平の御孫と授り

らり後五位下梅守も小位とらり。

去屋平八郎忠直上総守久多之の城と賜二万石梅考〇

是〇養世二万石云云武徳右威元公梅守と此〇武徳右威元公梅守と此〇梅考系も同上

梅守也守親良二男也兄秀治り二男也守子代丸と養

ふく而此の故り我身ハ幼小乃分りしと二万八千石と給り

自ハ一万二千石と梅考係

守居左亮也政法奥の國岩城と賜十方梅考〇

年表云守居左亮也此岩城十方石賜也梅考の

菩提一寺建立之也法名号長源寺と願百石なり
松平氏を為監成を丹波守と命じ城をうらふ
一万石
松平氏
伯耆系右と監作

松平氏右衛門守勝能久太右の政とたり
藩務係

相良左衛門佐長和と和と和久人ともいふ
藩務係○編り集成二面一の候伯質と就るの権要なりと記

中坊死後子秀祐初く
大徳寺に湯一門家入小

属し右野郡小治く食福と賜る
安土日記

阿倍正常と南府を改め初名に致年大久保と隣り許小

関者なり
古徳院殿を改め老衰と改め及られ

大徳寺に請く右政と御前と右々于時中政七十三歳
安土日記

○編り集成右政と右返し是老と改めり時と右く徳寺于又う矢のたと
訊くことありと記

金吾法平長と飛騨守とを子下主小讓く伏見守候

と
神君春遇浅く水屋とを舟の遊へく終日飲宴

く如ふ
武徳正成記○編り集成

世より佐後國に銀倍坊くく一万石目奉上一被納

と之代越後景勝被命領納の時分の僅なりと云ふ又

石見守金吾と倍坊くはわが費目被納是も之代屯

利懸えの時ハ僅なり候なり
内府も之國小なり

く如く右の如く金吾乃儀大久保と係るんを為

代友親ハ之被納毎年存ん多二月佐後ノおりの八月
伏見ノ上九月十月ハ石見西ノ下是令心お改りの巻ノ為
也 剣業経考云

佐後國以年貢始と 佐後年代記

浮友能上而結慶阿於若九而西次臣五位下小叙
浮友ハ能理多阿於ハ傳中ニ云但之り 海子集

丹波の赤井五布比古家ノ子六布中養ノ子石と与
らる 海子集

三宅越後守康久ノ子宗右馬ノ席政十四歳ハ
奉仕と 海子集

佐々木六角氏ハ補弔定ノ長男右之ノ賢子世を依

ノ次男大膳之十代と以ノ宗子と云 海子集

松浦法平ノ子肥前ノ久信卒二十二歳 萬福寺ノ海子集

今年ノり伏見奉仕二人業山小長田長田表

右泥團王貢 年表

武德集覽卷之六

慶長八年癸卯正月一日

徳大名悉く夜中より大坂へ赴き秀頼より謁し新正
と祝ひ其賀儀平く後大坂と祭りて伏見より赴く
是より回冬鳴。 大神若徳士の命 曰く春

正月の賀儀は秀頼より奉賀ありて伏見より
去りて 蘇志日記の創業は秀頼の武徳大成記の編の集成

二日

群臣伏見より城へ参りて 大神若徳士の謁し新正の

賀儀とありて 蘇志日記の創業は秀頼の武徳大成記の編の集成

代天... 伏見... 大坂... 謁し... 賀儀... 蘇志日記... 創業... 武徳大成記... 編の集成

十六日

松下石見守主總遠呂久野の城を修す

郡小張村より給ふ食邑二百石と賜ふ

内子石見守平尾村藤村より賜ふ常呂上村

平尾村藤村より賜ふ常呂上村

二月

賜甲兵於義利 後改義直 御年譜○嘉永元紀○創業紀考長三月と記す

通鑑○編年集成○武佐大成紀○永井宗七紀○考元

為津少将右恒休所と給ふ

二月廿日

内府公大坂より

為年礼也 創業紀考長

編年集成 三十一 神君伏見より大坂より

凡し之節に 神君在城より

母堂渡敷 内府着あり

六日

加賜彼前於池田輝政 御年譜○永井宗七紀○考元通鑑

武佐大成紀云彼前國と池田輝政より賜ふ

忠継り封國と云忠継附し

○武佐大成紀云彼前國と池田輝政より賜ふ

創業紀考云云池田三左衛門海前國と云下と来平

被出二流海前國の三左衛門の子三左衛門徳と云下ニ川

森右日記云池田友松于時有感右非君の二海前國と

賜く内兄の城を登くお礼を于時 人非君と云

御腰お告 古徳院殿より御腰給と云友松幼年

をく依く兄の利隆友松に代り是と知り伊川の

目と云る云云○武徳大成記ハ 非君吉光の服巻と云る云云

賜員作於賈忠政右と云信伊年信○森右日記○武徳大成記○創業紀考

改と云○苗額信十八万六千石と云○永井宗七記○考え通暹

賜河中將於上総介忠輝 元祐下総伊年信○森右日記○武徳大成記

○永井宗七記○考え通暹下総依合より為と云○苗額信十八万石と云

海軍集成云河内中尾十位万石と云より皆川山

城与廣照野呂長信 中三村の外に兵飯山に万石を領

して大輝之の侍長と云る 此より十位万石乃外なり 且長沢の松平

一族亦附屬也

皆川山城と廣照上総介大輝々小つありれ飯山

乃城と云ふ此苗額信

十二日

為征夷大将軍賜牛車衣杖因日淳和禁学而院別當氏

長忠仁右大臣 伊年信○森右日記○創業紀考云○武徳大成記○永井

宗七記○考え通暹○編年集成○西暦四〇〇年表

勅使伏見の事と宣旨と侍の官務外に宣旨と然

て永井右と左史直勝とと交取の一宣旨とて一覽

小入を御前より侍に毎度沙金一包と賜ふ若使例

依りて庭上より侍に御前より向ひて侍に御前

より武徳大成記の編の集成

廣橋大御言集勝勅使の事儀光豊武家傳卷一

補之賀儀の卷題とて二宝院門前侍合をて武

大成記の編の集成

秀康仁冬儀 所奉儀○所奉日記冬儀に記三位一叙と記○武徳大成記日

細川敏中より右具冬儀に記三位一叙と記

後

比田三左衛門尉輝政少将に記 後編傳○所奉日記○武徳

福徳左衛門大史正則に記の少将に昇 後編傳

加茂肥後守清正因中筑後守右政場尾行徳守右氏

後記位に叙 編の集成

板倉正房右衛門尉勝重後五位下小叙保加多とに記 後編傳○武徳大成記○所奉日記○編の集成

松平大左衛門一生叙爵 若校より小に記 後編傳

集成大左衛門正吉と記

山口勘兵衛忠友 但組 松平侍三郎重勝 但組 赤井

公前化力奉^{但豊}後^{三好}久^二年可^改後^{但越}位^五位り^一
叙^{海の集}

松平次右衛門^{主勝}位^{下叙}被^りる^一但^以故^考
東^{○海}海^集後^月と^るる^一

廿一日

自伏見入洛^{即奉^海○奉^右日記○武^徳大^成元○創^業紀^考吳○編^年集}

世頃井伴重友^{于^時十^一年} 祢君^不好^得一^遂心

右徳公^入奉^仁中^是ハ^公幼^少補^重友^改海^流河^一

民間^上於^て養^云日^と一^と一^と海^の集^成

世^別右^口左^右衛^門勝^右衛^門命^と義^り一^と養^と改^と成^と

是^ハ祖^父佐^治公^補任^互光^源院^義輝^将軍^の一^次と

叙^一柳^宮の^回式^と傳^ふる^一故^{なり}海^の集^成

慶^長庚^子以^車他^田輝^改一^許小^富兵^守牧^野信^茂

成^軍出^動氣^と許^ふる^一海^の集^成

右^友右^衛門^用相^形一^と此^勅氣^との^一海^の集^成

廿六日

如^事入^朝 即^奉海[○]内^在里^本方^一記

奉^右日記^云 大^祢君^為軍^宣下^の拜^賀

一^友 御^初 調^夕十^人 同^朋若^河派^騎等

一^友 御^初 調^夕十^人 同^朋若^河派^騎等

二番 御出奉り 板倉侍等

三番 紺色

四番 隨身者騎馬

右 中左衛門 波田半藏 杉原長六郎

左 山上源四郎 河田清左衛門 高木九郎

右 横田孫五右衛門

左 近友平右衛門

右 白張七人

六番 徳左衛門歩

右 竹中采女 豊前守 三好備中

左 佐々木良平捕 正友信徳守 松平若枝守

右 三好越後守 内友左衛門進 秋之但守

左 戸田采女正 石川五右衛門 酒井丹後守

右 松平右衛門佐 松平右衛門守

左 永井右衛門 三浦監物

七番御車 布衣 右 果侍清右衛門

布衣 左 成瀬少左

右 中心左助 柴田左衛門 横田甚右衛門

左 安茂甚右衛門 柿原甚右衛門 阿部左衛門

右 日下采女 長谷川左衛門 伊奈徳守

右 豊前守 松平 林友右衛門 於江宗孫右衛門

右 加茂右衛門 為右九衛門左衛門

左 石川半十郎 於築五右衛門

伊勢守 於本多澄政 伊藤唐俊

八五騎馬 徳左衛門 右 里見澄波右衛門 井仔右衛門 於東重勝

右 松平甲斐守 右 松平右衛門 右 松平玄蕃 右 松平清

右 松平 飛騨守 右 松平 石川長門守 唐通

右 本多上野守 右 純 本多中務右衛門 唐勝

右 本多豊後守 唐主 本多中務右衛門 唐勝

九女

越前守 秀康 豊前守 細川 於中

若狭守 京極 於次 播磨守 池田 於正

安藝守 少将 福富 左衛門 於正 於正

献物

主上 浪子 子板

親王 浪子 百板

女院 浪子 百板

女侍 浪子 百板

浪子 二十板 於大元守

乃の 海子集成

浮連政宗次男虎菊 于時姪 与云一お徳と

神若より刀 信忠 服巻 丸女右 と与云 古徳云より刀

ち家昭是 与永 と授与りり政宗則虎菊と家子と 集成年

松浦法平結任主孫信 于時才一筆 と携くく肥後より下向

そそ遠事と物 の 神若飯餅と二人小治之後 集

と与云 海子集成 上取く時隆信と以法平の奉領と譲り

御従と教り且駿馬と与云 海子集成 りり

那波右衛門望晴候女位り小教と上様と更小位 海子集成

小笠原為宗入及一庵法平肥前長崎守り 海子集成

集成

山口長次郎重行 後任侍 古徳云 眼と 海子集成

去年山身岩城王衛の助本根右と利政眼を小列

奥出達野少と二子名と授与り 海子集成 六子名の重税と

少法す 海子集成

二月

松平長江市 信忠 教尉 右田の古史 海子集成 右田の古史 海子集成

三月 海子集成 右田の古史 海子集成 右田の古史 海子集成

西尾太永教尉 海子集成

池田輝政 海子集成 古徳云 海子集成 古徳云 海子集成 古徳云 海子集成

九月と福いししと云ふ人

六月

古佐公の夫人 崇徳院姫君と獲く依人子あり

神君の婿 武徳大成記

海軍集成 云々 年月姫君と獲く入輿内大臣秀

カハ新く嫁とらるゝと云ふ依人也

海上の所建之 所集多〇年表十年と記

七月

自伏見入海 所集多〇赤古日記〇創業記考是〇海軍集成

十六日

海伏見 所集多〇創業記考是〇赤古日記

廿八日

秀忠長女嫁秀新大之孫 御後 崇徳院秀新大之孫

野幸長迎 崇徳院 所集多〇創業記考是〇赤古日記〇赤古日記

赤古日記云 古佐院殿の姫君 于時七歳 豊臣秀

新 于時十小嫁 御新 古佐院殿の江戶に御在城あり 御基 院殿

姫君の御送りのと云ふ依人子と云ひ 依人子と云

へ 婚禮の儀と云ふ 此時崇徳院殿伏見に於て一女と

嫁し 姫君に小嫁と云ふ依人の城より大坂小御あり

大久保お換りたる隣り御樂より後、西國大名河辺と發
圖を志田苑より長政より進路砲名二百と以てと
ちる堀尾は徳も人丈二百小報と打ちしは、是の如
の通り進み交りて、報と以て、罪守り、
後よ、さうく堀尾より、而るは、御威の候
有く、志田より、さうと、さうあひむと、
く、云、姫君の御樂、大守の橋より、あつ、く、橋より、
本城の云、園小、ま、く、墨と、交り、白綾と、以て、其上と、
覆ふ、く、と、氣く、是と、お定、ひ、りの如く、所相、市、ふ、云、
大守君、弟、藤、と、好、み、む、く、は、中、候、又、あ、く、意、を、あ、く、
さ、りの、火、強、く、割、る、よ、依、く、世、の、と、止、い、姫、君、の、御、樂、

大坂の城、入、ふ、大、久、保、お、換、り、たる、隣、り、御、樂、より、後、
紀、伊、ち、幸、長、と、く、志、田、と、進、く、心、
○武延大成記曰○海
軍集成、廿日、姫、君、の、
御、樂、と、所、相、市、ふ、且、之、候、を、さ、る、候、

八月十日

水戸中綱云、お換り誕生、
○御、弟、男、○年、表、於、依、入、城、以、誕生、と、記、

十月

松平勘三郎 右京、伊、徳、川、二、番、五、郎、
伊、徳、藩、君、の、末、子、 神、祖、亦、身、 推、六、十、六、歳、拜、
正、一、院、殿 伊、徳、男、
松平園情、三、席、え、卒、六、十、二、歳、
舊、編、傳、○亦、わ、り、記、は、婦、子、甲、
癸、さ、ち、良、家、傳、と、傳、と、記、○武、

立右の舟遠定大河内平十帝政勝劣既近也 海子集

十月二日

大神君の岳道所跡のたふは御あふりた所跡密指

と然り山岳主計以景以の婦子新右帝系中 八于時

とた所跡養子とと今日始と 大神君の岳

陰國古後より行へ合色一万石と賜 森

日記○古物傳法皇古後の地と記○海子集成小武田重代若光の
服及と記より主子新右帝系中と帝系古後一万石と与りりると記

十六日

里見右の以義康卒三十一歳 海子集成小
子新右丸娘継福と襲

元十一月十と記○八羽記多十一月十と記

十八日

右府家康公関东下向于日永京近可有下志と大

被お定と支少年の息 二長福之領小被逐跡之間

可有同乃と付と脱より俄と暗而所近下志と

初母若右兄 本帝左
自也殿 関関东く因乃と 劍業記考云

廿又日

立花左の爲監宗茂の庚子逆徒の属と知と没収

とられ剃髪立身と勢と加友清正の許小執事と

如主雄男と信由は是と右と奥具相念り

一万石と力と稱之 海子集成

十一月七日

秀忠兼右近衛大将右马寮御監

御年譜○武徳大成記○劍業記考考○海○集成○永井考考記

○孝之通監○年表○由馬寮

賜常良水戸二十石於於為

後改

御年譜○武徳大成記○海○集成○永井考考記○孝之通監○高橋

譜○海○集成○永井考考記

劍業記考考云於常陸國廿一石長福之孫領是ハ

去年遊去ノ子代之跡也 常良水戸城領行吉

之ノ時ハ十六万石也今歲十一月ノ於宣ニ賜ス

時廿万石ノ被成メ何年廿万石所加坊賜ス

美由之並トの山ノ也 日ト考考スハ

十二月廿日

神祖御養女

實ハ松平貞恆ノ子 康之ノ女

松平伯耆守忠一ハ所入與

所系累

十二月

神君江戶小御り玉ニ

武徳大成記○海○集成月ト考考スハ ○由馬寮ノ九月ノ考考スハ

世年

佐後世奉行内川村田中ハ為王七年ノ聖辰年

今ハ合ハ主ニ祝ス在リ田ノ依テ帝ノ在リ勤メ如シ七月ノ本ノ汁ノ

本刻増ス依テ百姓致シ江戶ノ諸ノ所ノ法ト云フ云フ

由味有リ如シ分ノ雖モ立テ在リ田ノ依テ帝ノ尚モ國ノ切レ腹

合伏主親改易 佐後年代記

依後金為進見中川市右衛門与右九郎左衛門板倉年人

とと色集人 横河也 ○佐後年代記

之年より因十九年迄佐後圍支死た人任石野寺長也

水本同上

松平勘定奉行吉敷齋佐後年代記 任安房与 与右九郎左衛門

戸田西平 子島左衛門氏法又山法佐後年代記

平岩主計以就右九郎左衛門の城石

と賜く佐後年代記

石川宗千右衛門忠信長五位り小叙主殿跡と稱也佐後年代記

丹波右衛門左衛門長定に戸城外の難所を築と謝り

右徳公舊好めり叙小主計と叙 幸徳古伝小

合是一二と云々武徳上成記 ○海子集成二月七と記 ○葉

新君の福 幸徳國古伝一萬石と賜く又長定古伝一萬石と賜古伝の地と以

二人小かり賜ひし也

東助の町人と十人組と云々あり依

將軍家作也十人の内一人惣定と托り九人共

下木因罪して是も不承依人等外迄と云々 盗賊令

礼納の間為改む所然も福人の責人上祖更

と慈賊室と池前く令運送一重し集成 創業記考云々 ○海子

長野内務卿勢長山田なりと成海子集成

松浦吉左衛門吉成百俵加恩との。流く俸米は百俵小及ふ 海子集

中山左衛門信右衛門吉成百俵加恩との。流く俸米は百俵小及ふ 海子集

城大目録の中 博洋福盗人有ん余と共く三似りして己の弘刀と良刀の差替へて去ると致す信右衛門と盗人と捕へ十三年水戸侯の侍と成候ある

と何れ 年表の海子集成左衛門とあり

海子集

武徳集覽卷之七上

慶長九年甲辰正月朔

右大将 秀忠 洋福と 門奉唐の刻書は秀忠

江戸城新正の誓候例のふと 藤右衛門

神君 右徳公共よ江戸城へ海へす列候候

士を官軍神とぞと 武徳大成江の海子集

右徳公成旦の御連歌

春の夜の夢さく浪の枕うめ

曙とくかきむじはの海

一村の雲と歌あはるるたもよと 海子集

十日

新庄駿河を直に五月廿日

人形若及い

右徳院殿小幡中膳長岡一親の時直に石田三成
小幡の侍等岡上野乃城小幡菴の千景小幡の蒲生
友三郎秀行の記ありし事長岡小幡長を直に
左車 大御若し志志ありといふも上方一編

石田り下知又後ふのり直に一人是れ其の志
志と立く記し信く不意味く三成身属く

一旦上野の城に捕菴の事と委く 右徳院殿

乃ら千景と教先有く下り御衆人小幡中膳長

徳院の海軍集威の蒲生信一人新庄駿河を直に

廿七

松前志摩の志廣く城表長控條殿と記す 海軍集威

二月

右徳院殿御命小幡く東海乃及城後海乃奥州

海乃上各一里塚と築りし事西下御衆人志と

監兵同年六月下旬小幡く成就し 徳大成記

東海東山小幡三乃又一里塚と記すしと記日と志と

○町奉行松前長友の由記云々 考七十一年 東海乃中山乃志と
○志記之里 ○八羽記 考七十一年 考八十一年 考八十一年 考八十一年

剣峯記考 考八十一年 考八十一年 考八十一年

作しは使打上度廿六万也一里坂入るは方也関东
奥多道右と通也本智路因如水

廿八日

素山修理亮一照卒 二拾二歳 葛城藩。

海軍集隊云 嗣子たりしはもと唐子の役軍功

ありしをすか左馬一重と遣使二万石と給ふ秋

後六位中少将なり

二月朔日

出江戸赴海浴熱海温湯七日 御年簿○おち日記○武徳大成記
○創書紀考考夫○山系里目とあるは

海軍集隊云 神君大御と元義利之長福丸打宣

主と獲くられ水上京とくくは城と登達と云

廿九日

意田如水卒云々 二十九歳俗名 おち日記○葛城藩○海軍集隊
官去帰孝高 意田勲命は孝言入る園法軒如

水と記○八羽記云々

廿九日

入伏見城 御年簿○創書紀考考夫○おち日記廿七と記○武徳大成記曰

大御君池田輝政の定しは御あり輝政容服と云々

時、輝政小福致多賜り内室 大御君 御姫 黄金二子取

と給ふ おち日記

廿九日

古徳公坂東の内大社の分悉く御造事あり且母
室書院殿の殿不駿府令栄山新泉より寺領二十石
比寄附の印章と賜 海子集蔵○創業紀考是、園生、神社堂
喜自、家番公有建立と記す

比月部り
當歳首より御立白戸より今日の内を以年以准
在り故休ん列候程長ありのり休ん之奉
神若く強揚りむ位以上一時岐一強と授あり
貞敷九十八人 海子集蔵○創業紀考是、六月日あり

廿日
冬後秀康に戸小事ありむ
古徳院殿に候

小松く是と候り候 海子集蔵○創業紀考是、正月日あり
海子集蔵○創業紀考是、正月日あり

廿一日
東臨于浅野野幸長 記す之あり
御奉儀○創業紀考是○海子集蔵

廿月
松平方左衛門尉一生年去 二十一日あり
海子集蔵○創業紀考是、正月日あり

六月下旬
一里塚志記と成礼 志記之置○海子集蔵○八朔記あり

六月部
武島江戸常信 創業紀考是

八日

秀康を伏見に被忌

刺業記考異○業の秀康に忌りたる
械と立く関東へ下りて此の儀なり

帰らざりしなり

十日

右大將入洛

伊年傳○秀忠見礼○武徳大成記○海軍集成
右大將入洛 依之儀○八朔記考異
東康云入洛
と云ふ也

十一日

右徳公清系内より定走らるる

延引 海軍集成

安友治右衛門正次為監使水戸小部

十七日

神君靈礼とらるる

海軍集成○創業記考異

廿二日

右大將系内

伊年傳○武徳大成記○海軍集成○秀忠日記廿一日と記○
八朔記考異○創業記考異 秀康云清系内の一と云ふ也

松平忠利位下より叙し主殿改ふ

武徳大成記
○秀忠日記

廿二日と記○海軍集成

水野介長位下より叙し後守に任じ

武徳大成記
○秀忠日記

廿二日と記○海軍集成

七月

伏見の御殿

創業記考異○ 秀康云の御事なり

廿日より佐和山の城と云ね山へ被移善徳あり
剣業紀
考案○
善徳傳の事と云ね春井傳を云ね正徳傳より云ね善徳の城と云ね被
移と云ね何れを云ねんこと云ねぬ

山頂伏見も石垣善徳あり西國元善徳お上善徳仁
剣業紀考案○海子集年月と云ねぬ

十の

伏見城下小行々松栢宮しゆ 神君の小姓花井
小傳より善徳あり云ね又傷云ね自殺と云ねぬ
平右衛門正俊の子也二十一年と云ね云ねぬ
善徳の正時云ね加恩と云ねぬ
善徳の正時云ね加恩と云ねぬ
善徳の正時云ね加恩と云ねぬ

十七日

善光生于江戸西丸
神年傳○善光日記母云ね井傳云ね長政女○武徳
大成江戸上○剣業紀考案○編年集成○永井善長
記○善光通暹の年表○善光年記

酒井維多政忠世御胞篋刀乃及之動
善光日記○武
徳大成記○海子
集或酒井在之好善光也とあり

武徳大成記云 右徳云の御姙子キ云云依云

神君甚御寵愛之幼名と授られ行々代君と稱

云云

公事傳于宰相秀康云見お撲
神年傳○善光日記
○剣業紀考案
編年集成云伏見云云 善光城元秀康の宅云云

後河原のしお撲と備へ 台後不備くらう家
其威駭物鋭士悉く席上よ袖と列礼形侯の陪長
若干庭上小崎臨し是と者お寔よ女奴の壯觀也
小お換既し決く後秀康々お撲の長越前の嵐
追手と前田利長の相撲の長加賀の頭礼組く互ふ
其力と争觀志卷と握り牙と嗔く胸と接つ暫く
追手秘術と奮ひ頭礼と投る於是庭上呼称
新り以吏士制せれしもはは付し秀康々庭
上よ臨みあはるる皆平伏し動息一時く止めり
よ又角力く追手跪くまはりし追手再び

頭礼と投る悉く 乃公還河後 神若を長小
向く今日最興あり 就中秀康々威威耳目と驚
而也と宣

十八日

夏川銭物定置盛年六十ニ成 在福福澤○盛年日記○海
年集成

廿一日

秀康之大名名と振舞あり 創業紀考云
法次の子小野之自依是内玉中申於依是あり
煩也 創業紀考云○海子集成
武江の相書あり 若若誕生

神君のち種小友の如御衣收り料、正西初名と授あり
り色、竹中代君と稱し、身も海に、海子集
安友派若拙の正次依り、よとく、于微恙、たし、り、と
言上り、海子集成

海

松平長比守

竹中代君

海子集

水戸と記

竹中代君御も、名、人、と命

年表

八月

右徳公武陽の御下向、海子集成

八月

城尾あまゝと右氏、卒、廿七歳

海子集、海子集の創業者記考、天保、
よ記目と考、あま

海子集成、あま、雲、陽、波、あま、の、あま、は、位、下、行、に

海子集、あま、と、右氏、卒、と、又、城、尾、あま、の、右、氏、今、存、生

海子集、あま、と、右氏、卒、と、又、城、尾、あま、の、右、氏、今、存、生

賜

十日

大久保石見守長安依り、ふ、と、く、と、因、ふ、ま、の、依、後
國の山岳益砂銀と、あま、り、穀、と、言、上、り、あ、年、い、あ
侯子、述、上、授、給、依、り、と、領、と、時、下、僅、と、砂、銀、あ、

十二月廿日

山尾左阿兵衛卒六十二歳

千巻子利吉子京平未幼ハ
京平の實父同主計氏京以ハ

下原本と銘ク
藤原信○家日記、及河原の送歸女子云を續ク
之協と信とら直
与力月公ホと支配事と記○編年集成ハ

十二月

青山雅乐介幸成

後大屋少
沖勅氣と家ノ訓長也

といへども世年十二月御終と家ノ訓長ノ候也京平

松平伯耆守忠一一本姓中村
伊谷一孝家臣横田内膳正と誅也日記

故ハ頃年忠一男ノ諱ノ國政と礼也是ハ依ク横田

強ク忠一と諫じ忠一是と怒ク家臣安井信一帝

を友也右衛門尉天野宗葉乃家臣右衛門尉道家ハ

大津若よりた一々室家ノ附ク
庶之娘と大津若御養女とてた一々娘ノ

と等とお懐ク横田と誅と人と謀るを友也

右衛門尉道家一と諫ク是ハ与ク右一横田と城

ノ一ハ終日の宴ハ其虚と親ハ右一横田と切

横田を被ク次の夜ノ遊ハ右一及ハ之臣ホ

是と遊ス横田ノ刀と持ク次の夜ハ候との童子

主の刀と以クた一と免よ切ハ天姥宗葉子と以ク

是と交ハ母も是と依ク宗葉右のちハ麻と被ク

安井及家ハ被ク童子と殺セを友也右衛門尉ハ此企ハ

与クたといへども右一長年ノ一ハ武切の横田と

殊と人ごとと危く思くを友長刀と携へて在り
間と限く密く是とお説ふの事より横田藤と被
く逃あるを友と待て文遂く横田と殺と内恨心
の場子横田主なる分をせしめし己の居城飯山の城
指免く旗と掲る太一の家人柳生入布右馬の尉と始
致事主なる物よりありて飯山の城に馳加るわつて兵
と奈くく飯山の城と圍む雲霧の溝必を多く依く
堀屋常口長晴同往徳も忠氏父子援えくく物
呂不奈くくたつて軍勢小事命く若く飯山の城
と圍く攻め城を能拒り殺すの事幸子の軍勢命

と預へ藤と被る者多し柳生入布右馬の公法達志を
よ依く其神と考としりて太一の家人藤井
助公指尉遂く柳生と討捕る幸子の猛勢敵の取る
の事城を遂く利と失く城より大と攻く横田主なる
及謀を考く自殺ともし依くを國彩布駱動と
也
大和表の上のく時をも妙く是と怒りか
く安井法一命を友長右馬の尉天野宗景道家
長右馬の尉小田人として江戸より召く御礼の看く後
者殺害するを友長右馬の尉ハ初く太一と強
く諫めし事多しと云は横田をかき殺せし事

そ罪と宥せしむる後年九一江戸より来候するを
横田と遊らる罪を依り江戸小入とてゆき
川の驛に整え居て日と遊く後赦免とあり
一遊ふ江戸小入とて大津若小湯と
記○編年集成の刺業記考異八年十二月のふり

中事

朝鮮人朱聘

全孝葬鄭孝葬の作○年表同八月に記

伊年藩の家老日記の
永井若史記○文元通鑑

武徳大成記云宗對する義智江戸小候の時
余の曰大岡再朝鮮と証伐して交信断絶を我朝鮮と

送眼なり彼國和義と欲をハテ誘ふ所を但そ
我より和義と求むるあり汝對する朝鮮國王
諭し彼意と試しハ義智即對する海に使と朝鮮
遣しそ和文の交と宗朝鮮國王本ハ疑ハ信て
猶も是のんと抱く七年松雲孫文成對する
和義信なくんハ江戸伏見小入と
若弟ありハ連小國より返らぬのみ義智千代と家老柳川
洞信小入して 神表より若く 神表の曰我來春右大
と若し江戸小入ハ朝鮮の使を携へて宗より入るゆ下
洞信國より若く義智より若く朝鮮の使信松雲及孫事孫

文武と勢とく活に入板倉伊勢守勝重命に依りて人徳と

旗館と一厨料と施し授く

海軍集成云 神君兼る市春は右幕下と共よと

活すくまの松の重なり人数の警多ありと朝鮮乃

使傳よんをくむいさる流さる板倉月代板倉勝重下

知くく大徳ると假し徳鹽館とたし厨料と悉く

授く授も安し一城奉のししし八月と云云

剣業記考異云世長自ら幕府を假松重太郎と云傳其

幕府公言事下向し知りし以後幕府を依りて翌年春

上と在京と云云

酒井左衛門尉泰次上野國碓氷と轉く因國と

傍の傳しありし石碓氷碓氷傳○幕府日記云月が浦泰次と記の

浦泰次傳○海軍集成云月大

牧野右馬允康成父子累めりこれく中尉と云伝中

傳

二宅也右馬の尉康成市郎の地加給りしと云

加賀郡奉母の口小うけりあつ石と加給りし中尉

傳

おる長つち長流の子利流のしと云はれし中領と下

端栗原中村若君也誕生のしとありしと云

海防集

松平三平江前後下総國山川の地み石と給

海防集○海防日記○武佐大成記○海防集成

永井傳八前尚政常以於此地石と給武佐大成記○

○海防集版

兼侍勤乞留尉由正関东の町より職と給○海防集

集成由正田政作

山内云依の一豊後位下入と給世日云正安と云茶屋

海防○海防日記○武佐大成記○海防集成

松平伴臣より行一松後位下海防

小教一也房より小但海防日記○武佐大成記

遠友在る介斐澄教尉海防

那次浪浪大猪と云海防

海防集小但海防

水野三左衛門尉分長教尉後与海防

山口勘去場尉重友後与位下海防

海防日記○海防集成

安友五左衛門海防

海防日記○武佐大成記○海防集成

小出板磨より秀政率年海防

夜堂之序子命 伏見御城水の子此繩張石垣等

成し 三年紀

系致智恩院之後 承康公建立 創書紀

渡邊右右衛門守備より男右左衛門成徳十二歳より

主徳公より侍より 海子集

西園の侯伯江府小左衛門の爲りて速く居館と經營

し 海子集

大出若松平右衛門守備安組之雲新左衛門成徳江兵

甲斐郡より千石加へ揚りて 但政より 惣より子 海子集

集

若野江宮の子守玄指彦種より三男三右衛門彦治江川條

十市氏彦より侍より小田原小笠原 修より左京大夫氏重より

野山小板より時父此命小依より 遜遜より 氏重之後

小糸氏彦より氏重より 秀吉公より 氏重の名海より立

りて成りて 又氏重より彦種より 神若彦彦次と

常陸介朝直より 改彦より 凡今年江宮末期より

頼朝より 彦次の子権左衛門英内僅五歳より

神若く 海子集 祖父江宮より 海子集 知稚の君は

朝宣君より 侍より 凡三年より 凡 春彦より 侍

はし 大正御上列を 海子集

二月十八日

右佐公今日江城と御首途あり海しりし
言ふゆゑに延滞せり
海し集成○創業紀考其○表老長

十九日

入伏見城 御年譜○創業紀考其○武任大成紀○表老日記○海年
集成○永井忠孝日記○表老通鑑○表老日記○坂日記

宗對する義智松雲孫文政と獲くく伏見城
よ入 神君小福土直と然り 神君對する

あ命して回我ら下と右大物に懐りしとんを
又朝鮮来貢使と率く江戶城に赴く

肥前國田代二子石と長智に加へ授事拜僧

玄藤と常衣と許し且松雲の徳に依りて年捕

来り朝鮮人の存する云と赦し返り帰すの暇と

あふ 武任大成紀○海年集成内○年表○殊殊事異朝鮮の男か二子
百余人と海しり日記

板金仔おるる小命くく曰智く朝鮮乃使えとぬ

くく右大物入海の形装とんとくくし海し 武任

大成紀○海年集成日

廿一日

右大物出江戶赴洛後兵十万余騎廿日至于神奈川

御年譜○表老日記○創業紀考其○永井忠孝日記○表老通鑑○
表老日記○川系里○坂日記

海船儀云二月大綱を海舟上流あり大物

お加久の出来事なり 日とあるは山○創業記考云

林系武初を捕虜致す 馳走り 津野 徳理を交
信吉 仙石 誠ある者なり 石川 玄蕃 以是より 属せ
次の日 伊達 政宗 奔途を 次の日 堀 左衛門 持重
津奈 途を 溝口 伯耆守 秀勝 是より 属せ 次の日
平 景三 年 次 就 長 小 笠 宗 信 徳 守 秀 政 奔 途 を
飯 初 圓 徳 守 杉 永 保 科 肥 後 守 正 光 守 右 忠 在
是より 属せ 次の日 平 氏 中 御 玄 宗 勝 奔 途 次 の 日
蒲 生 飛 騨 守 秀 行 奔 途 次 の 日 平 氏 出 雲 守
右 助 三 國 伊 豆 守 信 幸 奔 途 を 小 條 左 衛 門 吉 実

氏 勝 松 下 右 玄 田 尉 主 徳 是より 属せ 次の日 大 久 保
右 兵衛 守 右 兵衛 守 是より 加 久 守 右 兵衛 守 奔 途 を 河 州 志
麻 守 守 徳 庸 守 是より 属せ 次の日 大 久 保 守 是より 属せ
次の日 酒 井 雅 兵衛 守 世 奈 途 浅 野 宗 如 正 長 正
浅 野 内 膳 守 水 野 守 正 徳 守 和 泉 守 田 中 年 人 祐
市 務 小 玄 信 是より 属せ 殿 守 一 一
右 徳 守 以 是より 属せ 七 隊 守 以 隊 徳 守 長
二 隊 守 以 隊 守 所 守 所 守 所 守 所 守 所 守 所 守
所 守 所 守 所 守 所 守 所 守 所 守 所 守 所 守 所 守
長 刀 前 守 在 り 歩 卒 従 っ 後 正 徳 守 一 一 あり

發其福人右左の治世昨入海に准授せられし
時之隊富山を以てしりし之隊を以て康政の是
と命せりし二處に遠城前と政宗三處に在りし
秀信平海に伯耆と宣勝越後紫田城之に甲斐
房の城を平定し其に就て但小笠原信俊を長城
信濃飯田城之飯傍因幡を新永同之河城之
任科肥後を正光同之遠城之を新永同之河次
甲斐谷村城之を正光同之河次同之河次
飛騨を秀行七右衛門小滝城之を正光同之河次
の組と因幡を正光同之河次同之河次

更氏勝お換其儘松平右左衛門守信常陸水張
八五右衛門守信常小田原城之お換と婦子組
之右左と右房武蔵岩手城之信川志麻呂隆康
信俊飯田守正光同之河次同之河次
川越城之酒井右左衛門守信世に但水野市一
を勝福守の和泉守因幡守人正市橋守を信
淺野守如正長次常陸守同内膳右九組の
内毎組一組に旅行ししに右左衛門守止りて
右使の之所と信守守りし次守守りし上河
信甲の族の本居と信守守りし次守守りし上河

上方河内子雄次友雲内通子虎溝口孫左衛門
勝西尾隼人波賀按部勝政神谷沙五郎
宗公祐山平左衛門正次疏放民幼良保柴田三左
勝政阿波伯中子正次山名平左豊國入子津田
正義正房後改平服坂主水安信小出行信子左
英牧野傳我成軍後信守志田左子助水野
右市代永田三右次市本造左子助善心平左
右成水野隼人正忠信坂信守利平水野後
信守之次子騎馬信長其監使永田右左衛門
主利之次子平の信長長奴僕之監使永井

信守の白え因り司下多百助信勝二代山澤
滋之衛正守内友甚五左衛門信政日陰守山田
十左主利胡金友十市宣正同校築糸と朝金
宣正と司と。信々々々下の信士大胞子挺
弓右百張強子平長刀百本校糸二百の火抄信
と。し。○劍業紀考云。信能令の覆の百張より二百張葉校と皮陰
百本と也豹皮と記考云。右の百張の今橋内通と内通の友
有と云ふも於葉は右のと孫左子孫守山と云ふ物と云ふと云ふと云ふ
と云ふ友葉内通と内通の山野隼人正と隼人山川京十平及後信守
石川八左衛門永田三左衛門と我と他日

劍業紀考云云信陣一書上野酒井之内左輔
日大牧野駿河守上信内友左子助上野山平左衛門

二書松平上総介三友松平安房守

中野 同丹波守同 同丹波守同 同丹波守同 同丹波守同

如 依竹右京大夫同 依竹右京大夫同 依竹右京大夫同 依竹右京大夫同

信甲左同 本勇路同 本勇路同 本勇路同 本勇路同

廿六日

右大物至于友記御年譜○ 友記御年譜○ 友記御年譜○ 友記御年譜○ 友記御年譜○

廿六日

右大物至于小田原御年譜○ 小田原御年譜○ 小田原御年譜○ 小田原御年譜○ 小田原御年譜○

廿七日

右大物至于三浦連日 三浦連日 三浦連日 三浦連日 三浦連日

御年譜○ 海子集成御年譜○ 海子集成御年譜○ 海子集成御年譜○ 海子集成御年譜○

二月二日

右大物至于蒲原御年譜○ 蒲原御年譜○ 蒲原御年譜○ 蒲原御年譜○ 蒲原御年譜○

二日

右大物至于駿府御年譜○ 駿府御年譜○ 駿府御年譜○ 駿府御年譜○ 駿府御年譜○

二日

右大物至于友枝御年譜○ 友枝御年譜○ 友枝御年譜○ 友枝御年譜○ 友枝御年譜○

六日

右大物至于懸川御年譜○ 懸川御年譜○ 懸川御年譜○ 懸川御年譜○ 懸川御年譜○

六日

右大將至于濱松 爲于廿一日 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

八日 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

右大將至于吉田 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

九日 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

右大將至于忠清 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

十日 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

右大將至于法原 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

十一日 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

右大將入忠清之身有様牙 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

十二日 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

右大將至于大垣 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

十三日 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

右大將至于依和山 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

十六日 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

右大將至于永原 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

十七日 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

右大將至于膳所 三日爲于 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

廿一日 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

整行新入伏見城 御年譜○海子集○武佐日記○坂日記

池田新我利隆侍従不仁 武徳大成記○武徳大成記○武徳大成記

榊原十市康勝侍五位下不叙 武徳大成記○武徳大成記

徳大成記○海子集成

大久保右京亮教隆侍五位下不叙 武徳大成記○武徳大成記

大久保左衛門督信隆侍五位下不叙 武徳大成記○武徳大成記

高力左衛門守房侍五位下不叙 武徳大成記○武徳大成記

青山雅平卿幸成侍五位下不叙 武徳大成記○武徳大成記

永井傳八郎尚政侍五位下不叙 武徳大成記○武徳大成記

武徳大成記○海子集成

高木菅次郎正次侍五位下不叙 武徳大成記○武徳大成記

武徳大成記○海子集成

秋田左衛門守実季侍五位下不叙 武徳大成記○武徳大成記

武徳大成記

松平右衛門守正朝侍五位下不叙 武徳大成記○武徳大成記

武徳大成記○海子集成

板倉圓防守正宗侍五位下不叙 武徳大成記○武徳大成記

板倉内膳正昌侍五位下不叙 武徳大成記○武徳大成記

牧野信成任内通政海子集成

將軍宣下不依 下向不依 公不依 八不依 勅使不依 廣橋中

二番 仰西 日暮 一人
一人 松久長刀権阿部 傘持
3535 3535 3535 3535
12日 12日 12日 12日

仰西 日暮 一人

右長刀 小六日 日行 青山常陸介忠成
十徳自布 傘持
3535 3535 3535 3535
12日 12日 12日 12日

三番 仰先行

左長刀 小六日 日行 板倉傳次郎 勝定
カサ、ス 傘持
3535 3535 3535 3535
nnnnn nnnnn

右 右島田去也

四番 隨身丸

左 左半礼口右門

青山吾比郎 威瀬清吉 岩瀬長吉

内茂右衛門 柳原隼之助 阿比長三郎

大久保兵次郎 赤川金吾

高木九玄 神戶石見

六番 白張 十二人

六番 歩行 徳左衛門 右 浅野采女正
左 松平長門守

柳原遠江守 阿部徳中守 仙石誠也

松平誠中守 青山伯耆守 依野徳左衛門

青山雅乐卿

小出信清

吉田信直

大久保右卫门

高力左卫门

石川玄吉

大久保左卫门

加茂左卫门

池田内中

内友守

有子守

九鬼長門

山崎左卫门

古田玄助

户川肥後

佐友駿河

中川源理

滝川豊前

山城官内

佐之信清

金巻出雲

佐之信清

福葉新入

津田長門

行中信直

池田内中

三好因幡

毛利信直

三好丹後

寺沢志平

佐久右内

渡辺信清

友室信直

富田信清

水野河内

服部信清

徳永左内

社説信直

柳多常陸

古方丹後

生駒左卫门

素山信直

中多左内

田中隼人

内友新後

水野左内

服部左内

古屋氏新後

新久左内

古田左内

北条左内

湯嶋和泉

源信因幡

紫田新後

永井信清

高木左内

津田新後

溝口信直

高木左内

相模左内

長刀 浅黄小紋上下烏帽子
小者口付口付口付
口付
日友在馬助政長
十使白布巾
刀子口付
付付付付付
付付付付付
付付付付付

長刀 浅黄小紋上下烏帽子
小者口付口付口付
口付
鳥居左系亮九政
十使白布巾
刀子口付
付付付付付
付付付付付
付付付付付

長刀 浅黄小紋上下烏帽子
小者口付口付口付
口付
大久保お換右左衛門
十使白布巾
刀子口付
付付付付付
付付付付付
付付付付付

長刀 浅黄小紋上下烏帽子
小者口付口付口付
口付
平岩立針政親右
十使白布巾
刀子口付
付付付付付
付付付付付
付付付付付

長刀 浅黄小紋上下烏帽子
小者口付口付口付
口付
林京式部中納言
十使白布巾
刀子口付
付付付付付
付付付付付
付付付付付

長刀 浅黄小紋上下烏帽子
小者口付口付口付
口付
酒井右衛門左衛門
十使白布巾
刀子口付
付付付付付
付付付付付
付付付付付

八音 塗輿之礼
口付
毛利寧和
甲申了了考之

若狭少物 系極 口付
大橋少物 松平隆興与政宗

薩广少物 松平大膳与康久
安藝少物 福清左衛門与三郎

河内少物 松平上法外与藤
秋田少物 依竹左衛門与美宣

宍上少物 切羽与 与光
越後少物 堀久左衛門与秀治

今津少物 松平花好与善行
加賀少物 松平康与

歩行花与 烏帽子与 敷革物 傘物

武徳大成紀云 在徳公將軍官下の御方とて
系内其儀新色十二人二行先方者二人警蹕と唱
て次四人本梅と申すを御二人合符と申すに次
四人末列小ありに次は御方五人御方は小副に次
因用権河保騎馬長刀前とあり傘後とあり二人
馬小傍に十人は小傍に次は板倉侍加多と勝力主
青山常陸介と成騎了二行小お對し各長刀前
小在傘後とあり後士歩卒二十二人次は隨月
十二人騎了二行若田江前卒礼に在馬の青山
若田前成儀儀若田若田内方右馬(林系

年之助河口長三帝大之係次帝若川合右邊と申
九之掛掛戸石見と次は白丁十二人次は歩形乃
治之更二行松平河成と治治淺野系女正長主松平
越中守定徳林系遠江守藤後青山伯耆守若後
河成俊中と正次佐野河成俊と正石越守若久
大之係右系亮教隆青山雅系御幸成り力左と申
右房中出治治守若親石川玄若親守若田守若
信幸内方若力若具大之係主若山幸信有る
去若親豊氏加友若守若親若九鬼長守若守隆
池田守若守長若佐友駿河守若山傍守若中川

此程更秀成古田云初子埔至勝滝川豊前子河
肥後子達安佐之流路子山城子月子埔福葉系人
通道依之信信子津田長子令出云子可走老利
浮既子竹中伊豆子二好丹後子池田依信子
寺次志摩子彦子二好因信子与田信濃守
依久河内子水野河内子渡辺飛後子服坂流路子
安之友堂依信子高虎子方丹後子徳永子与助
生約左子之矣正俊能勢依子与素正依信子之略
本与常陸介水野市正和子大子母服坂子水正
田中集人依古尾氏初子埔子由内友系枝子流路

初永子新衣被前子依河因信子新永古田子之矣
柴田飛後子水條子由子之矣氏勝講也子与永井行
濃子与政子由子依子成次子由子水正正次相葉
子依子津田丹後子堀流路子由子由子堀依信子
利重子越川因信子且子初依子与子由子河内子雄人
松平右云信牧野豊前子行成水野集子正子海西尾
因信子板金月路子与子宗流道子山城子由子井子由子
利勝子久係加賀子与子常子并依掃部初由子由子法子
八十二人子左右小和分也相對子次子陌子初子小布衣
旧人安友依右馬子水法依云信子永源子由子由子

四月上旬

前田肥前守の上洛養子丸と因丸別

家康公（出仕を丸進と相令子世叔加賀守

二百端心袖の中（自 家康公刀服長下

秀忠公（丸進は進相令子あす叔加賀守

二百端心袖百也 因肥前守進相令子世叔加賀守

二重二百端也自 秀忠公丸進より刀服長下

肥前家丸進何也 秀忠公（有れさくも相令

心袖也世丸進 秀忠公の心袖也肥前守別

有海丸丸進伏也

創業記考異云○有れり記令子世叔加賀守令世叔加賀守作○海子集成心袖六十七と二百と字作三同丸丸進のものと云○海子集成

六月朔

列侯若二条殿（登々物軍宣下上礼の悉く果す

ことと繁（了す 武佐成記○有れり記○海子集成

創業記考異云 物軍家へち名小名有れ進上相

上方ち名或銀子或ハ心袖也なより（の丸ハ刀打

銭也（○有れり記○有れり記

二日

物軍宣下の有候とくく様系と候伏見の城先

徳侯祐士と徳公とらる 觀世入主春令割保生年
曲を 海子集成○考考紀○坂日記○坂日記○坂日記

十四日

一所の破る所の徳侯祐士と徳公とらる 觀世入主春令割保生年
乃振示と興行しむ 海子集成
神君あるも月之櫓より 古鏡振示亦其藝
の得失と論をらる 海子集成○考考紀

八日

大坂下民所物運送し人の心もお定その世に
秀頼依るくし始其上上始し終くむのり

大御前有内存此方城系於く大坂下 西成なり
大坂(徳公)如秀頼の母是是非共よと傳有し
る安若達く於て傳し秀頼と令生害すも
可有自害は頻くよと申すもいふ氏周系は斜
秀頼依るくよと申すもいふ氏周系は斜
より大坂(有月)通くよと依し秀頼上始延行
也 劍業記考考○海子集成○考考紀○坂日記○坂日記○坂日記

十一日

大樹遺才忠輝 上信介使于大坂 所年傳○武徳大城記○海子集成
劍業記考考云云 將軍家の名代上信介大

故に被弑別伏して被攻秀頼使氣し○あち日記○

此頃今及上洛とて皇東の元儀 將軍殿乃

作之立く思く○劍業紀考考是○海子集或○考

十三日

山内右衛門一豊の養子實ハ山内徳亮の子伏見の城に登

大徳院殿に始と賜と

約今小依く對するも又仁く松平徳政ち定勝り女と

大徳院御養女とて對するも又嫁とて先給子

于時 大徳院より御腰刀海子集或○考

在徳院殿より御腰刀新考五と對するも又賜と

又 大徳院より御腰刀則と云は依り編り

あち日記○海子集或○考又子と御刀と給り○武徳大
成化ハ四服と一豊又子給ふ 在徳院ハ四服と一豊又子給ふ
○海子集或一豊の養子左外 又云く海子集或又子と短刀と賜ひ

十六日

大樹出伏見赴江戸 御奉當○武徳大成化○あち日記○劍業紀

考其甚或然与脂而傍より布り給ふと記○海子

十六日

廿日 西然共湊に あち日記○劍業紀水は作○海子集或

法國造水 あち日記

十七日

龜山止宿

長日記○劍業紀考異○編子集成

十八日

桑名止宿

長日記○劍業紀考異○編子集成

十九日

水邊宿

長日記○劍業紀考異○編子集成

廿日

玉清願寺宿二日

劍業紀考異○編子集成○長

日記○故日記

廿二日

能育 長日記○故日記

廿四日

將軍家法則所立候今日使略

故日記○長日記○劍業紀考異○編子

集成

六月廿日

大樹入江戸

御年簿○武往成記○劍業紀考異○長日記○編子集成○長日記○故日記

十八日

加賀藩の利長致仕を養子爲す利光後改

一加賀藩中継中の二日と云相違実行しる

編子集成

七月六日

為徳伏見中城移于西丸
御幸傍○創業紀考是日の既
大御本伏見の西の丸は移りしるる次
○坂日記○海軍集成○其七卷○坂日記

神君列彦命御幸傍伏見の中城と徙すむ武

大威元日とあり

七日

能育御幸傍觀世寺より坂日記○其七卷

使五女友治右衛門正次江府より伏見中城官監

とて御幸傍

八日

能育御幸傍觀世寺より坂日記○其七卷

九日

能育御幸傍日吉村より八女はく坂日記○其七卷

なり坂日記○其七卷

十日

能徳尾長伊勢と白河大水伏見系より

水おびて東より水おびて川の堤西より

東より水切らば水入らば堤切らば

水入らば二十年以来の水の比より本宮川より

本宮川より水入らば水入水換り

○海軍集成

廿一日

自伏見入洛

所奉傍○海子集成

創業記考夫云 大所不御入洛伏見成形造作

之間其中可有之象と也○本長日記○故日記

林又三弟信勝り英才持恰既不上聽と鷹と永井

直勝と以て俄小石をうり一日船橋法系秀賢

元長光結傳り長光傳をたす 神君林氏は信濃武

乃種系前漢武帝の返魂香の如下と口しと

乃知言し委細と信と 台種と等とをり

羅心文 海子集成

廿二日比

二河夫作川と下彼通とて并持と堀と知らる

是 大所不乃依作也彼玉乃知行後長と其知

行百姓人は是言傳を士八百京二人百姓八百

石一人也 創業記考夫○本長日記○海子集成

八月十日

関东大風大水先人不足洪水とて去夏中干

題此年大凶年とて世水ハ関东中近也上方の

所奉傍 本長日記

十三日

帰伏見城 御年傍○剣業記考矣○赤石日記○海子集成○坂日記

九月

秋田安東右衛門実季秋田城介小伝後五位下

小叙山内去佐の傳に記す小若村伝小伝に記す 八歳解落○海子集成

十六日

公出伏見至于永原 御年傍○赤石日記○剣業記考矣○海子集成

忠輝義直杉宣の底子供奉海子集成

十七日

至于伏和山 坂田留于 御年傍○剣業記考矣○赤石日記○赤石日記

十九日

至于赤坂 御年傍○剣業記考矣○赤石日記○赤石日記

廿日

至于伎亭 御年傍○赤石日記○剣業記考矣○海子集成○赤石日記

山内去佐の一豊卒去二十 赤石日記○海子集成

廿一日

獵于福童山 獲鹿七 御年傍○剣業記考矣○赤石日記○赤石日記

廿二日

至于法次 留于此 御年傍○赤石日記○海子集成

剣業記考矣云云加納折寄 城並清本末乃

快事云云乃末時立於法次御年傍 有還

留 ○考長見記

廿二日

未歸于忠吉等見相撲 師年傳 ○考長見記 ○劍業記考長見相撲

廿五日

至于忠吉等 留于世 師年傳 ○考長見記 ○海子集賦 ○劍業記考長見

十月朔日

至于中泉

留于世 師年傳 ○考長見記 ○海子集賦 ○劍業記考長見

十六日

中泉立於 劍業記考長見 ○考長見記

十七日

至于因中

留于世 師年傳 ○考長見記 ○劍業記考長見

廿二日

至于駿府

師年傳 ○考長見記 ○劍業記考長見

廿二日

至于清水

師年傳 ○考長見記 ○劍業記考長見

廿二日

至于沼

師年傳 ○考長見記 ○劍業記考長見

長治 元河内と云 城主の友作志摩与日記類乃

乃令上洛 如不意死 日記 ○海子集賦考長見

廿六日

至小田原 御年傳○森右日記○劍業記考文

廿六日

至藤沢 御年傳○森右日記○劍業記考文

廿七日

至神奈川 御年傳○森右日記○劍業記考文

廿八日

遷入江戸 御年傳○森右日記○劍業記考文○海軍集成○吾長日記○坂日記○武徳大成記十八日と云云

十一月二日

初ノ吉院表に組と云々 御年傳○森右日記○劍業記考文○海軍集成○吾長日記○坂日記○武徳大成記十八日と云云

十日

松平竹全栄 御年傳○森右日記○劍業記考文○海軍集成○吾長日記○武徳大成記十八日と云云

十七日

仍于忍川越等處 御年傳○森右日記○劍業記考文○海軍集成○吾長日記○武徳大成記十八日と云云

廿六日

御年傳○森右日記○劍業記考文○海軍集成○吾長日記○武徳大成記十八日と云云

有違届

御年傳○森右日記○劍業記考文○海軍集成○吾長日記○武徳大成記十八日と云云

右使公常及此後心、神領六百石御寄附是

神君の命に依り也 海軍集成

十一月

是月より臘月小玉く信長儀乃心焼る海軍集
十二月二日

於江戸腹筋石見の改易を之故ハ夜約してお断中
害人于時何者の仕業といふこと不知然るる過切
かの世評小依く自 將軍森野、金と被掛下す
出のし札と被立て後石見を去りてこの世評形
乃る如也 劍書紀考文の海軍集
故日記に服筋石見の改易は江戸町中しく
過切敷多有く誰人といふこと不知公方より町へ
黄金とをせりてある業よりつと下り札と出立

城は病能らず然る侍奈徳就森東使小系小
とありと腹筋石見白昼に是を切伏し人遠
く切りしに令降謝意とも右の過切も大方
少人のしに説人へ降し改易は作付森内繁
と作付妙く上藩主田権右衛門と申老石州老母
乃金子取り置るる主田権右衛門切腹被
作付世石見等父の時今川義元の時侍誓と
駿河へ下り足輕軍衣込朝掛の働に双乃
功者也其後森康とて右ありれ鬼半就と
何時も此之手の働に此類父子二代因習可人

被仰付知り二子石令孫領松平陸海と尊よ成
威勢福き又小餘り壬午日と足勢よを意懸よ
あつり理不おの候ともまう果く世のこく
系めく世石見もよは歌も二百人乃因らハ
倭勢も也是皆常の因公よあつた全比よあ
倭勢國の百姓傳の末也ふんもり祖父も其内
なり然ともあく本國とあつた二尺く兼勢度乃
この名新骨とあつた今大弟も同公はハ國
あり能倭勢も士分ハ信長よも残討色も兼勢
く残百姓も居り時ハ信長生害の時倭勢乃

國と通りともあつた時人質とあつた送りも其の節
麻伏免進送りも切とも倭の切ともは信長よも
その後天下の事候の時分其時山案内中山も因
権右衛門兼地事分拓ともあつた少くともはあつた残倭
勢も兼は奉公候もよは石見も立このりあつた
麻伏免と送りもあつたあつたるは種も長も山見
歩行因公よこのと石見もあつたあつたハ市也ハ二
百人あつた山の手よ及あつたあつた別腹部
市見よは歌もあつた昔もあつたあつた倭勢もあつた
あつた國傳もあつたあつた石見もあつたあつたの傍家

なり苦情の有りたる種ハ手紙の致りの足腰
よく家来口紙けりて情はうも也日をも
是中ハ石見屋ハ侍賢よく我ホ先祖よりハ下
の腹筋なり二河ハ子く来りて此知り下され
大身よりのとて我ホもといく歌の歩り
日公よりのとて一向上人被受り仕立也とて
迷懐し及此書の外ハ石州方ハ来り石見屋とて
日公もとて情書付り付りてさしてはくをさし
とかくと悪友はくいふ事候とて若くハ枝折方
と押ハ括りて大小悪友ありしりある日公も

二日ノ同意とてありて日公と上事子とある事
を下の寺ノ取籠也所証する所ハ常打死下仕立と
り鉄炮持てて在り世も違上り石見は方悪
あくる日公とて一向上人被受りて日公は侍賢
は石見のる二百人と云ふは是様大おれ下付
らりて然とも侍賢の内日公のとて公棟梁り
ア折れ共十人由成致りて是ハ石見屋所証
上ハ下仍て此別を分りて此致りて是様大
物よと作上人係甚毒也ハ永源去傍腹筋中友
親有也ハ永源討くとも内切抜たははあり

あま子と人習ふ取られ子も切腹侍も有る形
お果は如妙二人を火落し経江へ糸隠居と
石見女か一人と付福のひしひしく彼を玉置の
前と通りあつと石見の付大不悦の打しえ
と通りあけさうけよ切しへ一同を一人根地不
のり形人と切しるすかふ形如西改易と作
○考七日記

十日

下野と度御煩甚危急自辰刻至午刻備如死人
終る午刻終る業とは申し入る如蘇生なり

齋特し

十月上旬より下野と度考七日記○剣業記考吳中
睡れ煩る後睡寐 旬と記○海子集成

十六日

下野と度病候し減却近日平愈なり
考七日記○剣業記考吳○海

年集成

南海法波時八丈橋迫大山一夜涌出

御年譜○考七日記○海子集成○考七日記○

年表

廿六日

帰江戸

御年譜○剣業記考吳三人御下自若川戦に人還河○考七日記
○海子集成○考七日記

西成列伏見お火有る云長尾より如浅野
瑞公今伴飛松平飛原老坂平助石川主殿

大久保石見守板倉伊賀守三田院波守遠心氏於其
外たるより町通焼失 故日記の云く日記の編子集成

三月

飯沼因幡守新水々婿子

大相國家の御前よりくえ膝し他律子孫忠澄

と名つる舊物語の海子集或は新水々子小吉市と記す一文字の刀烏帽子素袍と記す

廿年

大社若乃御命と奉く浅野深正少弼長政の

女と以く松平越中守定綱の婿故日記の云く徳大成記

大社若の女命小依く高は陸奥守も恒く女松平

院波守の婿子河内守定行の婿大社若命有

く曰ふはハ 森守の乃定く嫁娘の守儀と

後くつゆく阿茶の局一位と并に侍女十に上候

婚礼の儀式と執く又村越茂助日記の云

右の婿の命く婚礼の式用と誓く

柿系式於大埔康政の女と 大社若御養女と

池田輝政の婿子右衛門惣利隆後武蔵守と改む

大社若の御娘守りといふも利隆別腹改りて室守ハ

少く申川原守常尉徳守の如也 小婿と云ふも

寺の婿守も成系與と役く土井大炊利勝

御具桶と設け安友射する事信形殿と存存丹
喜し舟亦是に従ふ其婚礼最良也淺野孫正長
政忠田孫あり長政容態と相伴り加友肥後も
法正淺野紀保も幸長蜂伊賀阿波も主徳加友
左も御前明小馳走を
大徳君より御腹初言
御腹名た文御馬二利隆小賜り。孝右見記
武徳大成化云々
名徳名林東康政の女と直春娘
と〜此田輝政の嫡子武徳と利隆と嫁と
婚礼の儀式最重なり〜と輿言中より孝右心
播磨も大成事輿と設け〜上井大物氏利勝日桶

乃と勤し安友射する事信形殿と存存丹
播磨も康勝お授け利隆の宅小主と淺野孫正
長政淺野紀保も幸長田孫あり長政加藤
肥後も法正増次伊賀阿波も主徳加友左も安友射
小即往く是と賀し利隆宴と設け書成利勝
と答へる田長政淺野長政伴合さるり
神君者江の御腹初言又孝の御腹名并御馬二正
と利隆小授け〜孝右見記より少長徳の○編○集成よりハ
御入輿り終り後日利隆と菅中〜事と
うれ
名徳名并孝右江の力左又孝の御腹名良隣二正と終り〜ハ
孝右見記○播磨傳○御腹名○年表
江ノ原栗田郡日野郡野洲郡の内小旗合是

太子石在東の料とくく酒井雅重に世に賜ふ
赤木日記の苗孫傳

右徳院殿の命と奉く山口但るもき政大盛次
とすの 赤木日記

一柳監物大盛の次男大盛 後更他と号れ 駿府より

系候に始く 大 神君の湯く又江戶に去り

右徳院殿より湯を大盛に奉り 駿府

江戶に在り毎。八十余人の猿蓑と賜り 赤木日記

○此の集成車盛り一男大盛と名づけの苗孫傳大盛と名づけて

祚君は府に於て或言へば所寄く御海城乃時牧野

侍成成里今年地年お平人の隊長となり大平

乃の今の百人位 赤木日記 とすは頃の風俗より二男大盛 十代

と稱し賜物 赤木日記 祚君遠く 右 成成里と名く

彼稚子と尋むに忽ち準と名く 赤木日記 号とられ汝年

齡より遠く長たし 赤木日記 壯勇のおあり今より

大樹に似く忠と名く 赤木日記 と仰あり又成成里と

仰あり 赤木日記 但るは侍成成の名とあり 赤木日記 懐念と也

成成命と名く 赤木日記 御謝を 赤木日記 海子集成

徳心お去御成政海城とて法眼より 赤木日記 集成

後友成と名く 赤木日記 命令を介判と始く 赤木日記 遺を

らるる主目三錢目二分なり 海子集成

巨城暹羅貢 年表

頃日書表の相承迄の徳人好く也 年表〇 海子集成

〇山第男十一年記

海子集成 暹羅貢 年表 頃日書表の相承迄の徳人好く也 年表〇 海子集成 〇山第男十一年記

